
知られざる世界の旅人

たつたまごっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

知られざる世界の旅人

【Nコード】

N8398X

【作者名】

たつたまごつち

【あらすじ】

え？テンプレ？転生ですか・・・やっぱり一つの世界じゃ満足できねえ！少しマイナーなチート？（道具）を貰いさまざまな世界を旅する物語です。

旅の始まり（前書き）

自称ドクター（偽）が世界をめぐる旅です。処女作、最強要素、原作破壊、ご都合主義がダメな方はお引き返しねがいます。更新は不定期です。

旅の始まり

さあ、みなさん死ぬとはどんな感じなんだろうか？

僕はついさつき体験したからわかるけれど生きているみなさんはどう考えているんだろうかな？

まあ、世間では走馬灯が見えるとか三途の川を渡るとか言われているけれど、

そんなことはない！断じてだ！

俺は死んだ……

まあ、テンプレのように子供を助けたとかじゃないけど

なんか某隙間妖怪さんのようなスキマに吸い込まれたわけだが

死んだ感覚というか自分が消えていく感覚があったから死んだと思うんだけど

「じゃあ俺は今どこにいるんだ？」

今俺がいるのは真っ白くて何も無い空間、奥行きも高さもないただ白だけの空間だ！

「ここはボイドとか虚数空間とか外の世界では呼ばれていますね」

また髪の毛が鮮やかな青色なよう、よだった。

「え？」

俺はフリーズした……

「お〜い〜す〜い〜ま〜せ〜ん」

「……………」

「返事してくれませんか？」

10分後…………

「お〜い（泣）」

「うわ！？どうしたの？」

「いったいなんだっていうんだ？」

「私の話を聞いてくれますか？」

「涙目で訴えてくるので…………」

「だが断る」

「何ですか〜（泣）」

「そろそろ本気で泣いてしまいそうだから話を聞いてやるっ。」

「は〜おふざけはここまでにして話して?」

「はい！単刀直入に言います。あなたは消えました。」

「え？死んだとかじゃないの？」

「こういうのって間違えて死にましたとかじゃ？」

「死んだといつても過言ではありませんが本質的には時空間の裂け目に落ちました。」

「時空間の裂け目？」

「そんなドクター・誰的なものがあるのか？」

「そーですね。世界の歪みたいなものですよ。」

「前にこの世界で起きたのは大体6550万年ぐらい前だったはずですね。」

「6550万年前って恐竜の絶滅したときじゃねえか、そんなのが起きて地上は大丈夫なのか？」

「今回の規模も小さかったので被害は最小限！つまりはあなた一人だけですね。」

「俺一人だけか・・・って俺の心読まれてね？」

「ええまあ、一応世界の管理者やっていますから（キリッ）」

「よう、よで言われてもね」

「わたしだって好きでこんな体してません！！といますかそんなことうでもいいんですよ！これからのことを決めましょう」

これから？俺は消えたんならこのまま存在も意思もすべてが消えるんじゃない？

「そんなことすればすべての世界が消滅しますよ？」

え？何それ怖い……

「すべての世界での命の総数は決まっています。一つでも減れば莫大なエネルギーが生まれすべての世界が消滅するということですよ。そーなのか！

「ここからはよくあるテンプレと同じく少しですが願いを叶えましょう。そうですね、数は4つですかね？一つにつきオプションもつけましょう。こんなところですかね？」

「基本的に何を頼んでもいいの？」

何でもは無理でしょ？だってよくチートオリ主が使うような世界を破壊する力とか創造とかやばくね？

「そうですね？神にしてくれとか命の創造とかは無理ですね。じゃあ基本的のなんでもいけるのか……

「じゃあ一つ目にめだかボックスの日之影空洞の「知られざる英雄」《ミスターアンウン》とそれに見合うだけの戦闘能力を」
ぶっちゃけめだかの完成ジ・エンドとかよりかっこよくない？

「見合うだけの戦闘能力はその異常アブノーマルの付属なので願いの消費は1つですね。」

じゃあ次は子供の時からの夢を叶えよう。

「ドクター・フリーに出てくる次元超越時空移動装置を世界を渡る能力を付けてそして俺でも弄れる様に簡略化しておいてくれね？」
子供のころからこれに乗りたかつたんだよね！

「え〜と、簡略化はいいんですが世界を渡る能力は例えば物語の世界に行つたとしてもそれはパラレルワールドにしかありません。本当の物語の世界は封印されており誰も外から干渉できません。まあ、パラレルワールドと言っても99.9999%同じですけどそしてむやみやたらと歴史をかいへんしないでくださいね。下手をして世界が壊れては困りますから」
すっげー！ほとんど叶っちゃった。後二つはと……

「3つめは十二の試練トライエンをお願いしたい。」
fateで一番好きなサーヴァントの宝具だしね。

「え？ターデイスとくれば種族をタイムロードにしてくれとかじゃないんですか？」
あんたタイムロード知ってたんだね。

「そりゃ〜ね〜本物と友達ですしね。」
え？

「まあ、そんなことはどうでもいいんです。じゃあなんで十二の試練トライエンなんですか？」

「タイムロードだと再生するたびに顔や体が変わるだろ？それが世界を移動している間になればまた前の世界に戻った時に不便だからね似たようなのを思い出したらこんなのがあつたからね。これを選んだんだ。」

「では、十二の試練トレットを付けておきます。これもタイムロードつぱく再生から15時間以内は細胞活性化時間として腕ぐらいなら再生するようしておきますね。」

「やっぱりこの管理者はオプシオン抜群だな!!」

「最後は知識をお願いします。具体的にはすべての世界の知識をターデイスに詰めておいてくれないか?そしてその該当する世界に行ったときにその世界の知識が頭に流れ込むようにしておいてくれないか?」

これで世界で迷うこともないだろう。

ゴマダレ、

ゼルダのような効果音が鳴る響く……このなにもない空間にこの音が響くのは非常にシユールだな。

「はい!ターデイスに付加完了しましたよ。え〜とターデイスの形はどうしますか?カメレオン回路は壊れていませんから行った先で形を変えますか?それとも今ここで固定しておきますか?」

「う〜んどうしようかな?でもやっぱり!」

「あのポリスポックスをお願いします。」

ターデイス(改)とはいえやっぱりターデイスはあの形じゃないとね(キリッ)

何もない空間が光り始める。そしてあのターデイス独特のエンジンの音が鳴り響き……何もない空間にあのポリスポックスが現れた。

「これで要求はすべて満たされましたがあとなにかありますか?」

幼女が「幼女言うな！！！」

管理者がそう言う

「一つだけ聞かせてくれるか？」

俺は最後に一つだけ聞きたいことがあった。

「なんででしょうか？」

「君はずっとここで一人つきりなのか？」

「ええ、そうですか？」

管理者が淡々と言う。

「何も思わないのか？」

「初めのころは寂しかったですけど今はもう慣れました。」

慣れたと言いつつも寂しげに俺の微笑む

「じゃあ最後のオプションの追加だ。ここにもターディスプレイで来られるようにしてくれるか？」

「！？ なぜそんなことを？」

本当になぜかわからなさそうに俺に聞く

「君が寂しそうだったからな……」

せつかく可愛いんだ大人になるまで待ってれば美人になりそうだからな

「君には笑っていてほしいんだ。」

くせえ……臭すぎる……誰か〜ファブリ〜ズを

「え……は、はい／＼／」
顔を赤らめながら言う。

あんなセーフこんな冴えない俺になんかに言われたんだ。羞恥心抜群だろう。

「あ……これでターデイスは要求道理ですよ？では、最後に容姿などの設定に行きましょうか」

容姿か？何がいいかな……

「容姿は上の下ぐらいので頼むもちろん性別は男で年は24歳ぐらいからしておいてくれ。」

「了解しました〜」
せつせと幼女が作業している間俺はどの世界に行くかを考えていた……

「作業完了しましたよ！ではいつてらっしやいませ楽しい世界の旅を！いつでも戻ってきてくださいね〜」
笑顔で見送ってくれる。

「あ、最後に私の名前はアテネです。おぼえておいてくださいね。」
そんな有名な人だったんだ……ま、関係ないけどね……

「また来るから〜またね」
といいターデイスの中に入る……

中は第9代目ドクターの時のターデイスとほとんど同じ少し違うのはモニターだけですべて操作できることだけだ。

ドクターのように操ることはできないしな、あのボタンの中には自爆スイッチもあるみたいだしね

そしてターデイスは何もない空間から独特のエンジン音を鳴らしこの空間から消えていく……………

アテネ side

「あんな奴君以外は初めてよドクター？」

アテネが尋ねる人物こそかの有名なドクター本人である。

彼の世界に管理者はいないそのため代わりに管理者代行として時空を回っているのだ。

「ああ、そうかもな。実にファンタスティックだ！」

ドクターがふざけたように言う。

「まあ、ファンタスティックかはおいておいても彼は世界のためになるわ」

「後は彼次第かな」

「ええ、もう行くの？」

「ああ、もう行かないと……………ではまた」

「また会いましょう」

こちらもさつきと同じようで違うエンジン音を鳴らしながらターデ
イスは消えていく……………

「後は精々楽しませてもらいましょー!」

そう言いアテネはこの空間から消える。

誰もいなくなった空間

そして物語はこの空間から始まる……………

旅の始まり（後書き）

こんなもんですが今後も見ていただけると嬉しいです。
ただターデイスを使って世界を回るのが見たかっただけです（笑）

ターデイスの中そして初めての世界

俺はアテネと別れた後このアテネにもらった魔改造ターデイスの中を探索することにした。

そして今……………

「すっげー!!!!!!」

こんな叫び声をあげることになったのは思い出すこと2時間前のことである。

二時間前……………

「まずは、この手紙を読むことにしようかな？」
ターデイスに入っただけのところ、手紙が裏に「アテネより？」とか書いてあったので破りたくなかったがその衝動を抑えつつ手紙を読むことにした……………

— 《こんにちは？アテネです。あなたは今どこで何をしていますか？と「you」ネタをしてから話を進めますね。ではまずこのターデイスですがドクターフー本編で言っていたように普通の乗り物ではなく生きていますので機嫌を損ねないようにね。それに艦魂のようなものから見つけたら話しかけてあげてね、そしてこのターデイスは地下10階までありますよ？疑問形なのは自分でもわかんないからね…………多分地図はメインモニターに映し出されるはずだからそれで調べてね！そして最後に2つ、一つ目はこのターデイスは本当のドクターフーの世界には行くことができません。理由

はドクターが世界を隔離しているからです。そして2つ目は自分の名前を決めてね。

君は文字道理世界から消えたから名前、痕跡、記憶、すべてが消えているので君の名前は使えません。

では、

楽しい世界の旅を〜 アテネより》

そーか、だから俺の名前である「×× ×××」は発音も書くこともできないんだな。……

やっぱりずっと使ってた名前だからな惜しみたくなるけど……そうだなー新しい名前は……「ドクター」

やっぱりこれだろう。よし、名前も決まったことだしターデイスの探索をしようかな。

メインモニターをいじり地図を表示させる。

ターデイス内部

一階

メインルーム

二階

居住スペース

三階

食糧貯蔵スペース

四階

武器貯蔵スペース

五階

ダンスルーム

六階

図書館

七階

ゲストルーム

八階

病棟

九階

訓練スペース

十階

??????????

広すぎねー（呆）

無駄に頑張りすぎだよアテネエ……

1階だけで広さ的には豪邸レベルなんだぞ……

まずは、武器を見に行こう！

四階 武器貯蔵スペース

「すっげー!!!!!!」

つい年を忘れて叫んでしまった。

しかしその筈全世界の武器・道具が所狭しと並べられているのだからな

「これは、一〇式戦車じゃないか!!!!」

10式戦車だけではない世界中の戦車がある。

「ワルサーP-38!!!!!!」

「素粒子ガンまで……」

「こ、これは、デイエンドライ（ry」

自重しろwww

「武器だけでもうお腹いっぱいだな」

そうして見つけた……これを「ソニックスクリュードライバー」だ！

ドクターフリー縁の物はいろいろあるみたいだな。サイキックペーパーにエクストラポレーターまであるみたいだ。でも、つなぎ方が分からん。あの空間に戻るか……

ギューーン！ギューーン！

白い空間に現れるターデイス

「あれ？ずいぶん早いわね？いや、あつちはもう結構な時間経っているのかしら。」

「アテネ！エクストラポレーターの調整をしてくれない？」

「何で？別に使わなくても旅自体はできるんじゃないの？」

「いや、エクストラポレーター自体はそれほど重要じゃないんだ。それで発生させられるフォースフィールドが必要になるかと思つて」

あれはダーレクのミサイルでも効かず宇宙規模の大爆発でも効かないという優れたものだからな

「来るのはわかってたけど、こんなに早いとはね。ここで調整すれば10分で済むわ、ここでお茶でも飲んでいきなさい。」

といい何もないところをつかんだと思うとちゃぶ台とお茶を出す。湯気まで出てるぞ。

「この舟借りるわね」

・ と言いつターデイスに入っていくアテネ・・・やっぱり小さいな・・・

「あゝおいし」

10分経過

「調整終わったわよ。メインモニターから動かせるから、じゃあ、
いってらっしゃい」

豪く簡単にしたもんだな。やっぱり管理者は伊達じゃないというこ
とが。

「ありがと、いってきます。」

ギューーン！ギューーン！

何処かの世界の宇宙に出る。

メインモニターをチェックするとフォースフィールドの項目がある。
簡単な設定は此処でできるようだな。

そろそろ初めの目的地を見つけようかな・・・
いつまでも宇宙空間に漂っている訳には行かないしね・・・

「では、初めは『東方p』ガタツン』！？なんで勝手に止まった

「……………」

まあ、旅は長いんだ東方の世界はまた今度にしよう！

「ターデイスよ、この世界の知識を頼む……………」
大体分かった」

「この世界は『涼宮ハルヒの世界』だ。」
やっぱり俺が異世界人のポジションなのかな？
ってこの世界についてと思ったならなぜターデイスの中に長門とキョ
ンが？

あ、そうかこの座標……………」

「情報結合の解除を申請す……………」

かの有名なヒューマノイドインターフェイス長門有希と朝倉の戦い
の真っ最中の封鎖中空間に入っちゃまったみたいだな……………」

どうしよう？

キョンスイデ

俺は朝倉に放課後呼び出され殺されかけた……………マジで死ぬ5秒
前だと思っていたとき長門が助けに来た。

長門と朝倉の宇宙的戦闘を真近く見そして長門が鉄の棒に刺された
と思った瞬間……………」

独特のエンジン音が鳴り響き鉄の棒の前に昔何かで見たことがある

特徴的なポリスボックスが俺と長門を巻き込み現れた。

今度はなんなんだよ・・・もう勘弁してくれ、やれやれ

s i d e o u t

ターデイスの中そして初めての世界（後書き）

二話目です少し強引ですが勘弁してくださいね
感想お待ちしております！

初の戦闘

おいおい世界についたと思っただけに戦闘開始ってか？
まあ、いいまずこいつらに話を

「おい、誰もいないのか？」
キヨンが言う。

おいおい俺がいるじゃねえかってそうか「知られざる英雄」《ミス
ターアンノウン》のせいで存在感がない、いやありすぎて無意識的
に目をそらしているのか？おっと、長門は気が付いたようだな！そ
の証拠に長門はその透き通るような目をこちらに固定しているしな

「うお！なんだお前？」
声を張り上げるな……

「そつちこそなんだ俺の船に勝手に入りやがって」
こつちはなにも知らないふりをしておかないとな、そうしないと怪
しまれてしまうからな……

「すまんが何が起こったか俺には分からん！宇宙で「あなたは少し
黙っていて」
長門がキヨンの話すのを遮る。

「ここは何？あの空間は朝倉涼子が封鎖していたはず何も入れない。
どうやって入ったの？」

「質問をする前に君たちは何なんだ？まず、名前を教えてください

い

「長門有希」「××× ××だ。」

「え？なんだって？そちらの男の方が聞き取れなかった。もう一度頼む」

なぜ聞き取れないんだ？キヨンの方だけだ
日本語をしゃべっているのか？50億の言語を自動翻訳するターデイスですら翻訳は無理だというのか！

「××× ××だ。」

もう無理……人間諦めが肝心だな！

「あだ名を教えてください」

「な、なんで？」

「彼ではあなたの名前を聞き取ることは不可能、強力な情報防壁がある。私でも解くのに1億年以上かかる。」

長門が驚愕の事実を言う。もしかしたらキヨンの名前がこの世界の根底にかかわっているハルヒに何らかの影響を及ぼすのかもな

「はあ、自分の名前も言えないとは……キヨンだ。みんなからはそう呼ばれている。」
「だるそうにキヨンが言う。」

「俺の名はドクター」

「ドクター何？」

あっ、あっぱりそうなるか

「只のドクター誰でも無くなってもないドクターだ。」

「いいや、ドクターとやらお前はいつたいなんなんだ？」

「俺はこの世界ん定義で言うなら異世界人で超能力者だ。」
「俺密には異常だけどこの世界じゃ変わりもないだろ。」

「で？何をしにこの世界に？>ガ、ガッタン<！？」
「この衝撃は？」

「外にいる朝倉涼子の攻撃、ここも危ない」

「ここが只の閉鎖されているだけの空間だったらな。ここはターデイス僕のターデイスだ。世界、そして時空間を旅するんだ。情報操作ごときではやられないよ」

「なあ、長門どうする？」

「一旦体制を立て直してからもう一度戦う」

長門たちが何か喋っている間に俺はフォースフィールドの設定を完了させ作動させる。

「やつぱり、おまえらは卑屈だね？まずこうというのは、話し合ってみるんだよ！」

「といい俺は勢いよくターデイスのドアを開ける。」

「おい、ま、ま」

最後まで言い終わるまでにはもうドアを開けていた。

「あら、あなたがこのヘンテコな青い箱をこの空間に運んだ張本人ね？別にどうでもいいわ、あなたゲイトオブヒロインと消してあげるわ。」
と朝倉は鉄の棒を某英雄王の王の財宝のように打ち出すが

キーン！カキン！バキ！

といったように俺の前の透明な壁に遮られ俺には1つも傷をつけれない。

「それだけか？無駄だね。ポイントゼロ、フォースフィールドがすべて跳ね返す。で？どうする？」

「それなら、接近戦を挑むだけよ。」

そう言い朝倉はナイフを持ち高速で迫るが

「接近戦で俺に挑むとは笑い話にもならないな。俺は軍隊と一人で戦えるんだぞ？」

そついい朝倉の腕をつかみ投げ捨てる。

「おい、長門とやらもう時間は稼いだだろ？」

「情報連結解除開始……」

そう、長門が言い始めるとターデイスを除いてすべての机や椅子そして朝倉の体が消えていく……

「あゝあ残念所詮私はバックアップだったかあ」

「硬直状態を何とかするいいチャンスだと思ったのにな」

「変な乱入がなかったら達成できたのかな？でももう言っても後の

祭りね。これをあなたたち人間は後悔って言うのかな。」

「私の負け 良かったね延命できてでも気を付けてね、統合思念体は」

と原作と同じ言葉を朝倉は紡ぐ

「最後にあなたは誰？」

「ドクターだ。ただのドクター。」

正直名前はないしな

「じゃあね、涼宮さんとお幸せに……………」

朝倉は完全に消滅した。

「教室を再構成する。」

言ったそばから教室が再構成される。

「で、どうする？まずは何処かへ行こうか。さあ、入れ」

そうして、二人はターデイスに入り

「君の家に行こうか？座標を」

そして長門が映画の時のように腕へ座標を渡す。

へえ、てか何でわかるんだろう。ご都合主義ってやつだろう。

ボタンを押し教室からターデイスが消えていくとき

「WAWAWA忘れ物」

ゲ！谷口だ、忘れてた……………」

ギューーン！ギューーン！とポリスポックスが消えていくのを

「うお、ナンナンダー」

谷口が目撃した……

まあ、谷口だしいいや

あの三年前に行ったときの部屋にターデイスが現れ『ガガガガツガ
ガガ』あ……天井が……やべええええええええ

初の戦闘（後書き）

ご覧ありがとうございます。

フォースフィールドってスタートレックとかのと同じですよね？
次回詳しい自己紹介を

自己紹介！

さあ、長門の家についたわけだがどうしようかな……あの音は確実に屋根潰したしな、長門に後でどうするか聞こう。

ガチャ

「ここは？」

キヨンが呆けたように聞く

「ここは長門の家だ。」

ここがああ長門の家か……感激だな。

「そう。ここは私の家」

「まず、あなたは何？こんな技術この時代にはない。世界を移動するなんて情報統合思念体にもできない。そしてIITTFを圧倒する戦闘技術あなたは人間？」

長門がマシンガンのように質問してくる。

「まあまあまず座ってもいいかい？」

「どうぞ」

とあの何も無い部屋に座る。

「で、ドクターとやらなぜここにきた？」

「ここに来る気はなかった。違う世界に行こうとしていた。その世界は魔法や妖怪などがいるような世界だ、だがターデイスを作動さ

せた途端トランススマットビームいやそんなレベルじゃない、謎の何かに包まれた。気づいた時にはこの世界だ。長門よなぜだ？なぜ俺はこの世界に来させられた？」
大体検討はついているんだけどな。

「おそらく涼宮ハルヒがここにあなたを此処に呼んだ。あなたが現れる少し前涼宮ハルヒから膨大な情報フレアが観測された。それがあなたとこの移動装置を此処へと呼び寄せた。それがあなたがここにいる理由。」

「だからターデイスがこの時間軸に固定されているのか、つまり俺はここから動けないと・・・」

「そう」

「どうしようかな？でも、少しターデイスを調整すればいいだろ。無理でもあの白い空間はすべての世界の上位世界だから移動は関係ないしな。」

「じゃあ、詳しい俺の説明をしようか。」

「あなたは何？」

「俺はさつき説明した通り異世界人で超能力者だ。」

「じゃあ、あんたはどんな超能力が使えるんだ？」

「キョンが聞いてくる。そっぴゃここまでキョンは空気だったな・・・」

「具体的に言えば俺のは超能力というよりは少し違う。これはある世界での「異常」《アブノーマル》と呼ばれる力だ。それに俺の「

テレポート」やら「サイキック」なんて言うわかり易いものじゃない。「知られざる英雄」《ミスターアンノウン》と呼ばれ誰も俺を目視することができず覚えても置くこともできない。」

「それは存在を認識できないという異常アブノーマルということなのか？」

「結果はそうだが過程が違う。これは俺の強大さに目を逸らした結果だ。あ、勘違いするなよ俺様とか言ったりするような強大さじゃない単純な強さの副作用みたいなもんだからなだからこそ長門のように人間と違う存在には効かないし俺よりも存在が強大な存在には効果がない。まあ、そんな存在は神様が悪魔とかまず人間じゃないなぜなら俺は一人で軍隊と戦えるからな。」

「な………」
キョンが絶句する。普通一人で軍隊と戦えるなんてアニメや漫画の中にしかないからな

「じゃ、今日のお話はここまでさあキョンは家に帰った！帰った！と無理やり家に追い返す。」

「長門も帰った方がいいと思うよな？」

「思う。」

「てなわけで、さようなら」
ガチャと音が鳴り長門の家から追い出す。

「さて、話すことがある。キョンは気づいていなかったようだがな。や、屋根がぶっ壊れてる。何でもする許してくれ………」
「
と言いつつ土下座する。」

「別にいい。後で直しておく。」
おお、長門が寛大でよかった。

「あと一つ少しここ借りてもいかな？住む場所がないんだ。町にこんな古びたポリスボックスが在ったらへたすりゃ撤去されちまう。」

「いい、この部屋をつかって」
と言い、部屋を貸してくれる。長門感謝だな。よし、ここでやりたかったことがあるんだよな。明日までに準備しないとな……キヨンの驚く姿が目に見えかぶぜ！

キヨンSIDE

今日はいろんなことがありすぎだ。朝倉が殺しにかかってきたり、え〜と誰だっけあの男は？だれか忘れたが謎の男が青い箱に乗って現れ朝倉と戦い長門が朝倉を消した。文字道理消したんだ。もう今日は疲れた、寝よう……

『翌日』

今日も始まりあの長門《宇宙人》がいるであろう学校へ向かい……

「ねえキヨン！新しい先生が来るらしいわ、入学してからすぐよおかしいとは思わない？」

そう、我らがSOS団団長涼宮ハルヒだ。昨日ここで自分が望み探している宇宙人の戦いがあったとも知らずに新しく来たという先生に夢中だ。なぜこう近くのことには気付かないんだろうな？

「その先生は物理の先生らしいわ！ねえ、聞いているの？キヨン！キヨン！」
と肩をガンガン脳震盪でも起こしそうなくらいな強さで揺すつてくるので

「聞いているよ。そんなに騒ぐことでもないだろ？都合が変わっただけだろ？それに今日はちょうど一時間目が物理だからな。それで判断してみろよ。」

「あんたに言われなくても、そうするわ！どんな奴か気になるわね！」
別に俺は気にならないよ……

キーンコーンカーンコン

ほら、岡部のホームルームが終わったぞ。何か岡部の話だと先生は男で24歳アメリカで大学を飛び級してるらしいな。何でこんな学校に来たんだ？どこかの大学やら研究室からの誘いぐらいあっただらうに。

すぐにその疑問は解決されることになる。

「あれ？先生遅いわね。もうチャイムなっから3分ぐらいたってるわよ？」

ハルヒが尋ねると

「もう来てるぞ」
と教卓から音がすると

「うお！」と谷口が声を上げる。そして生徒がそこに目を向けると

「さあ、物理の時間だ！」

お、お前は昨日の！何で！ここに！？

SIDE OUT

自己紹介！（後書き）

主人公を話に絡ませようとするとこうなりました。

でもドクターが使ってたジョン・スミスは使えないしな
名前どうしよう・・・

感想受け付けてます！

俺の職業

「みなさん今日も元気かな？俺の名前は日之影空洞だ。」
と言いながらカクカクと音を立てながらチョークで黒板に名前を書いていく。偽名は迷ったがジョンスミスはやるとやばいのでやめ、そうなるこれぐらいだろう。日本人顔なのにヘラクレスはないしな。英雄の名前は使いたくない。めだかの世界では考え物だな。

「学校で教えるのは初めてだからおかしな点があるかもしれないがここところは頼む。」

「じゃあ、授業を始めよう。まず、俺が物理を専攻した理由だが昔俺は宇宙人やタイムマシンやらにあこがれてたからだが今でも信じてはいる。まあいいこんな昔話しても仕方がないので授業を始めようか。じゃあ、教科書１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

キンコ～ンカ～ンコ～ン

てなわけで一時間目は終了だな。

「最後に何処かの部活の顧問をしたいと思ってるから何かおすす
めがあれば廊下にいるときでも捕まえてくれ。じゃあ、今日の授業
はここで終了！」

そして、終わると同時にハルヒが全速力で走ってくる。

「先生！私のクラブの顧問をしてください！」

SOS団に顧問要るのか？鶴屋さんは名誉顧問じゃないのか？

「いいがどんなクラブなんだ？」

「宇宙人や未来人などを探し出して一緒に遊ぶクラブです！」
初めの言葉で大丈夫だと感じたな。

「面白そうじゃないか。放課後どこに行けばいい？」

「文芸部の部室へ。」

「わかった。放課後になり次第そちらへむかわせてもらおう。」
後ろでキヨンがものすごい呆れてるがどうしようかな？ま、キヨンはいいや。

「では、放課後に」

「あ、今度から素で話せよ。」
と耳元で言う。

「!?!?」

一瞬びっくりしたようにしジト目でこちらを見てくるが無視する。

ハルヒSIDE

やっぱり見込んだ通りだったわ。来ているのに誰も気づかないなんてありえないわ。いくら空気が薄いからと言ってこれはありえない、何かの力に違いないわ。それに一発で私が猫かぶってるって気づいたしあなたの正体を暴いて見せるわ！

「おい、聞いているのか？」

キヨンが聞いてくるが

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「おい！」

「うるさいわね！いまあの先生をどうやってSOS団専属の監督にしようか考えてるの、邪魔したら罰金よ。」

「へいへい」

待ってなさい日之影空洞！

SIDE OUT

キングクリムゾン！

過程が消し飛び結果だけが残る！

そして放課後だ。今あの文芸部室の前にいる何か感動のようなものを覚えるな。そうして「失礼しま〜」・・・・・・・・・・・・・・・・「あ、きゃあああああああああああああ！」バチイン

「すみません。日之影先生」

「いやでも着替えのぞかれたら誰でもこっぴどくなりますってこちらこそすみません。」

「涼宮さんに呼ばれてきたんですか？じゃあ、お茶入れますね。」

着替えを覗いてしまった。なぜか「知られざる英雄」《ミスターア
ンノウン》も効かなかった。ギャグ補正か乙女の補正かどちらにせ
よ怖いね。でも、有名な文芸部室で朝比奈さんのお茶が飲めるなん
て感激だな。

「はい、おまたせしました。」

フ〜フ〜「俺の猫舌なんで。」

「そーなのか」

とたわいもない話を朝比奈さんとしていると

ガチャ

「朝比奈さんだけってあなたもいるのか。日之影先生いやドクター
と呼んだ方がいいか？」

キヨンが言う

「ここでは一応日之影と言っておいてくれ。ハルヒにはれるの面倒
だ。」

「わかった。」

「？」

朝比奈さんだけが訳が分からなさうにしているがそんな仕草も可愛
いですね。さつきもそのたわわと実「バシィ」

「あれ朝比奈さん何を？」

「すみません。失礼なこと考えられたような気がしたので勘違いで

したらすみません。日之影先生「

怖い朝比奈さんこんな朝比奈さんは「トウー」ry

「長門は？」

「今日は休みらしいぞ。昨日あんなに戦ってたしな。疲れてるんじや？」

今日の長門

「これどうしよう」

屋根と戦っていた。

閑話休題

「で？あなたは此処の顧問をやるつもりで？」
あきれた様子で聞いてくるが

「ああ、もちろん」

「はあ、やれやれ」

ガチャ

「遅れてすみません。」
と言いつつ古泉がやってくる。

「こんにちわ。古泉くん」

「はい？ああ、あなたは今日赴任してきた日之影先生ですね。こちらこそよろしくお願いします。ですがなぜここに？」
「と言いつつもちらが何者が探っているようだな。」

「涼宮に此処の顧問をやってほしいと言われてな。」

ガチャ

「ごっめ〜ん！遅れたわ。日之影先生これでいいわね？」

「ああ、これからもそうしてくれ、それにここじゃあ空洞でいい。」

「じゃあ、空洞、何かこの部活に質問はある？」

「何をするかは聞いたから部員は？」

「私含めて5人よ。今いるのは朝比奈さんに古泉君そしてキョンね」

「いいだろう。顧問をやればいいのか？」

「ええ、お願いするわ！」

「すまないが今日は仕事が残っているんでな。また明日から参加させてもらうよ。」

「明日は休みだから、不思議探検をするわよ。9時に駅の北口集合、遅れたら罰金ね。」

「わかった。じゃあ、また明日。」

そして、土曜日の今日

「キヨン遅いな。」

「遅いわね。あ、来たわね。キヨ〜ン罰金！」

そして、あの喫茶店でくじを引く、俺は……古泉とか……
・くそう何でハルヒや朝比奈さんじゃないんだ！

「では、よろしくお願いしますね。」

キヨンは長門とハルヒは朝比奈さんと3組に分かれて探索へ

「12時にも一度ここに集合ね！何か見つけてくるのよ。」

さあ、古泉は何を話してくるのかな？

「どこへ行きましょうか？」

「そうだな、この町を知らないので適当に頼む。」

「では、少し時間を潰しましょうか。少し離れたところの喫茶店で話しましょう。」

「ああ、わかった。」

喫茶店

「単刀直入にお伺いします。あなたは何者ですか？」
お、これは大胆に聞いてきたな。もっと回りくどく聞くもんだと思
ったよ。

「何者と言われても俺は日之影空洞としか言いようがないな。」

「失礼かと思いましたが少し調べさせてもらいました。ですがあな
たのことは何一つ出てこない。そして尾行してもいつの間にかいな
くなる。僕が聞いているのはあなたが例えば超能力者だとかそつい
うことです。」

やっぱり調べてたか。昨日から少しおかしいなとは思っていたから
な。まあ、尾行の時は異常全開で消えたけどな。

「そうか、じゃあ、観念しよう俺は異世界人だ。あと超能力かと言
われれば少し違うが能力も持つてる。」

「では、あなたはなぜ涼宮さんに接触を？」

「いま、俺はこの世界には来るつもりはなかったんだ。世界を旅し
ている途中この世界に引きずり込まれた。だから長門の家に居候し
ている状態でな、移動装置の設定が完了したらさっさとおさらばさ。
涼宮に近づいた理由は面白そうだったからな。あ、俺は涼宮をどう
にかしようなんて考えてないからな。」

「信じるかはあなたの行動で判断させてもらいますよ。では、探索
を続けるとしましょうか。」
「いい伝票を持ち古泉は立ち上がる。」

「ここは奢りますよ。情報料ですよ。」

といい、後はこの町を案内してもらった。何の変哲もない普通の街なのになぜこんな人外魔境になっているんだらうか？ドクターのカーディフのように時空の裂け目の跡地なのか？

さあ、12時になったのでもう一度のくじ引きだ。よし、今度こそ！

なんで？おのれ！涼宮！お前は何なんだ！てな感じでハルヒとなりました。朝比奈さんは？どこ逝ったの？長門は？

「なにそんな不機嫌そうな顔してるのよ。私とがそんなにいや？」
別にそういうわけじゃないんだが見た良し頭良し運度神経良しと三拍子揃っている美人と歩いているのになぜだ？

「いや、そういうわけじゃないんだが？」

「なんで疑問形なのよ。」

「いや、なぜこんなにきれいな女の子と歩いているのに何も感じないんだらうかと思って」

「デートじゃないからじゃない？それに恋愛感情なんて一種の気の迷いよ。気にするものじゃないわ。それでも仮に科学に身を置く者なの？」

「ああ、その通りだな。」

としやべりながら町を探索したそして集合時間間際にこんなことを

聞いてきた。

「あなたは宇宙人や未来人、超能力者そして異世界人が本当にいると思う？」

「授業の時に言ったろ。俺はそれを探すために物理学者になったんだ。自分で自分の夢を否定してどうする。ここにこの日之影空洞が宣言してやろう。宇宙人、未来人、超能力者、異世界人はこの世界にいる！」

「ばっかみたい、空洞が宣言して何になるのよ。」
と言いつつも笑っていた。そうだよ、いるんだそれも君のすぐそばにね

そうして今回の不思議探索は終了を迎えた。さて、この世界にはいつまでいようかな？

俺の職業（後書き）

名前は悩みましたが能力から考えさせてもらいました。
少し長くなってしまう。
それでは感想をお願いします！

次の旅へと

あの不思議探索から数日経過しキヨンの方はあの探索で朝比奈さんからアプローチを受け、古泉からは昨日アプローチを受けていた。モテモテだな。

そして俺は部室で古泉とゲームしたり朝比奈さんと雑談したり長門に本を貸してもらったりしながら過ごした。

そして今日おかしなことが起こった。それは、少し前に遡る。

4時間前長門家にて

「長門よ、お前たち情報統合思念体は自立進化の可能性を探るために涼宮ハルヒを探索してるんだよな。」

「そう。情報統合思念体は自立進化の可能性を探している。だから涼宮ハルヒを観察している。」

「そこだよ。なぜ涼宮にこだわる？他にも自立進化の可能性はある。」

「！？それはなに？」

「こいつだよ。」といいターデイスを指をさす。

「これはただの次元超越時空移動装置特に特異するべき点はない。」
わかってないな。

「わかったよ。連れて行ってやるから手伝ってくれ。」

「わかった。」

と長門に言いくるめられカレーを奢ることが確定しながらもターデイスの調整をしているとき……

ガタン

とターデイスが揺れ機器から火花が散る。

「どうしたんだ？」

長門に聞いてみる。

「涼宮ハルヒが新たな世界を創造しようと新しい時空間に自分と彼を閉じ込めた。」

ああ、あれは今日だったのか。

「これでそこには行けないか？」

ターデイスなら……

「今の調整では不可能、できるとしても……」

キョンスIDE

妙なことになっちまったな。閉鎖空間にハルヒとともに閉じ込められちまったな。古泉はどこにいる？

あ、あの赤い球体は

「古泉か？」

「はい、そうです。」

「もっとまともな姿で登場すると思っていたが？」

「それも込みでお話することがあります。正直言いましう。これは異常事態です。」そうだな。」

！？声のする方に目を向けるとドクターが

「なんでお前がここに？」

といい触ろうとするがスウウと手がすり抜ける。

「あ、あれ？」

「そつだ、古泉ですら無理なのにどうやって入れると思ってるんだ？これはホログラムだ。俺の船から映し出してる。」

「そついえば朝比奈みくるから伝言を言付かっています。ごめんなさい、私のせいです。」と「長門からはパソコンをつけるだよ。」

「俺からは一つだけ眠れる姫を起こすのは王子様の仕事だぜ。」
古泉とドクターの体が消えていく……

「お、おい、まて」

「パソコンをつけるよ。わかったか？じゃあ、世界はお前にかかっている。勇者みたいでいいだろ？」

といいドクターが消える。

「では、私もこれまでのようですね。そちらの世界で私が生まれるようなことがあればよろしくやってください。それでは」

おい、古泉まで……よし、パソコンをつけよう。

SIDE OUT

とここからは原作通りだ。特に言うべきことはないだろう。

あの空間のエネルギーを吸収したお蔭でこの世界から離れられるようになった。

「キョン、やったな！」といい肩を叩きまくる。

「軍隊と戦えるような腕で肩をたたくな。へたすりゃ吹き飛ばしちゃう。勘弁してくれ。」

「つれないな。さあ、差し詰めお前は世界を救った勇者ってところだ。さ、ここからはどうするハネムーンか？」

「ふざけんな。」

「まあまあ、これで俺はお役御免だな。ここで俺は消える。そして知られざる英雄で忘れられる。いままでは異常を最小までに抑えていたが最大にまで上げる。あ、お前たちの記憶は消えないぞ、長門に頼んで消さないように頼んだからな。残念だったな。三日後俺は発つだから電話番号を覚えておく。」

「何でこんな急に？それに世界が違うのなら電話は通じないんじゃない？」

「元々違う世界に行くつもりだったんだ。その世界に行かせてもらうよ。俺の電話は特別性だぞ。宇宙の端から端でも届く。世界も同じだ。」

「じゃあ、何時に行くんだ？」

「三日後の夜7時だ。」

「長門の家に7時だな？」

「ああ」

そして、三日後

「なんでハルヒ以外全員集合しているんだ？」

「僕は世界を移動する装置を見たかったもので」

古泉が正直に

「私は普通にお見送りに」

朝比奈さんは可愛らしく答える。

「一応SOS団の顧問だからな。見送りぐらいする。」
キヨンが答える。

「じゃあ、俺の船を見せよう。」

といいあの部屋の襖をあける。

そこにはターデイスがある。反応は三者三様

「これが？これは1960年代のイギリスでのポリスボックスじゃないですか。」

古泉が

「こ、これはまさかこれがここに？じゃあ、あなたは……なぜあなたは驚愕しているんですか？朝比奈さん？私は未来で何かしたんですか？俺……」

「やっぱりこれか。見た目は変わらないのか。」

キョンが言うがこの見た目がいいんじゃないか。なぜわからない。

「古泉よ。なら中を見てみるか？」

そついいドアを開ける。

ガチャ

「これは……すごい！」

なんかすごい古泉のキャラが変わっているな。これが素か？

「はう〜」バタア

朝比奈さんが倒れた。

キョンは外で待っている。

「なぜ見た目より中が広いの？」

「企業秘密だ。」

「では、行くとしよう。長門よ、調整は完璧だな？」

「完璧」

「では、出てくれ。」

「待つて、これを」
といい長門が一冊の本を渡す。「ハイペリオンの没落」よりによっ
てこれか……

「読んで」
といい見つめてくるので

「ああ、わかったよ。」

「では、出てくれるか？」
ガチャ
ドアを閉める。

「じゃあ、何かあればまた来る。また逢う日まで。」

「では、また」

「またね。」

「またな」

ギューーン！ギューーン！とポリスボックスが消えていく……

「行ったか？」

「この世界から彼の反応が消滅した。」

「またと言ったんです。また会えるでしょう。」

ターデイス内部

「ハルヒの世界はまた来ないとな最低でも消失の時にはな」

では、あの空間に行くのでしょうか、

白い空間へ

「もう私にこんな子を押しつけてあいつは何を考えているのかし

らっ..」

アテネはつぶやく。

「言ったところで無駄でしょ？待ちましょ、気長にね」

ギューーン！ギューーン！とポリスポックスが現れる。

「やっと来たわね。」

ガチャ

「あ、アテネあの送った子はしっかりしている？」

「ええ、ここにね」

「.....」

「無言でナイフを構えるのはやめてもらえませんか？朝倉さん」

次回へ続く！

次の旅へと（後書き）

強引ですが終わらせました。正直この世界は消失やエンドレスエイトがありますのでまた後でも来る理由は山ほどありますね。ドクターにはやっぱパリコンパニオンが必要でしょう。ということではルヒ本編では初めと消失そして驚愕にしか出ていませんので朝倉さんにご登場願いました。

では感想よろしくおねがいします。

コンパニオン

なんで俺戦ってるの？

「ハアアアア！拳破拳破、拳々破アッ」

「ふん、効かないわね。今度はこっちの番よ。」
ほんとになんでこうなったんだろうね。

一日前

「無言でナイフを構えるのはやめてもらえませんか？朝倉さん
なんでナイフ向けられてるの？」

「てか、何で向けられてるの？」

「そのぐらい自分で考えなさい。晩御飯までには帰ってきなさいよ」
「おい、まてアテなせとめない。それに晩御飯ってなんだ。」

シュン、ビュン

「おい、まて話せばわかる。」

「問答無用」

なぜ知ってる？ ナイフ避けながらネタやるのは神経使うな。

「私あそこで消えたんでしょ？何でこんなところに送ったのよ」

「いや、一緒に旅をしてもらおうかな」と

「何であんたと一緒に旅をしないとイケないのよ」

「戻ったところでもう統合思念体とのリンクは切れてる。今の君は妙な力が使える人間じゃない美少女女子高生ってな感じだ。魔法少女もビックリだな。」それはもうね。情報連結解除なんてどんなチートだよ。

「じゃあ、どうしろってのよ……」

「だから俺と来い。その中で答えが見つかるかもしれないだろ。それに元の世界にずっとは無理だが少し見に行くぐらいなら定期的にさせてやる。」

「いい、行かせてもらうわ。でも一つだけ条件があるわ。」

「そんな簡単に決めてしまっているのか？」

「だからこそその条件よ」

「何だ？」

「何なんだろう。俺に死んでくれとかはきついな。まあ、死んでも死なないけど」

「私と戦いなさい、あなたが勝つたらついてく、あなたが負けたらその時は……あなたの命をもらうわ。」
「おお、過激だな。」

「いいだろう。アテネ合図頼む」

そろそろ行こう

「勝ち負け決まってるないけどいいわ、じゃあねアテネ」

「また、3人でご飯食べましょ」

「ああ」「ええ」

「「またね」「」

「ええ、また」

ポリスボックスに入る

「何此処！」

といい外に飛出しポリスボックスの周りをぐるぐるとまわる。

「中の大きさと見た目が比例しないわ！なにこれ！こんなのに負けたとすれば納得できるもんだわ。」

「あ、ああ、勝手に納得しておいてくれ」

次の世界はどうしようかな。あ！朝倉に聞いてみよう。

「おい、朝倉「朝倉ってのをやめてくれない？他人行儀でいやだわ。これから長く共に旅をするんでしょ。」

「わかったよ。涼子ちゃん」

「涼子ちゃん言うな！涼子よ！わかったわね。涼子よ」「ナイフ向けながら言うのやめてもらえませんかね？

「わ、わかったよ。涼子ね、涼子OK、OK」

「分ればいいのよ。分ればね／＼／」
顔を赤くするほど嫌だったのか・・・残念だな。涼子ち「何か？」
だからナイフ向けないで・・・

「涼子、どこの世界に行きたい？」

「どんな世界があるのよ？」

「どんな世界でもある。剣と魔法の世界、未来都市、科学と魔術の世界、夢の世界、冥界や天国、魔王までいる世界だってある。より取り見取りだ。」

「じゃあ、妖怪が見てみたいわ。本で読んで見てみたかったのよ」
あゝ、涼子が目を輝かせながら言うてくる。

「じゃあ、出発だ！」

そう言いターデイスを作動させる。

「2000年代に行こう。」

ギョオン！ギョオン！独特のエンジン音を鳴らし動き・・・
ああ、着いたか。

まず、外の様子を見よう。このパソコンで見れるだろう。ガチャ、ガチャ　なんか外で軍隊みたいなのがターデイス囲んでるんだが、これってヤバいところに出たか・・・あれ？一人だけ軍隊じゃないな。あの特徴的な服は・・・

「さあ、外に出てみよう。」

「大丈夫なの？武器持って構えてるわよ。」

「こっちは武器なしだ。やられてもこっちに正義がある。」

「不法侵入だけどね。」

「これは痛いところを……。」

「では、参りましょうか？お姫様」

「行きましょう。」

俺が涼子の手を取りターデイスのドアを開ける。

ガチャ

「おい、貴様何者だ？」

軍服の一人が聞いてくる。

「俺h「待ちなさい、こちらから名乗るべきです。私は八意永琳です。あなたは？」

やっぱりえ〜りんか……

CONTINUE

TO BE

コンパニオン（後書き）

やっぱり東方の世界に行ったとなれば歴史のーから見ていくべきで
しょうしね。では感想よろしくお願いします。

天才

「俺は「待ちなさい、こちらから名乗るべきです。私は八意永琳です。あなたは？」

「やっぱりえりりんか……」

「俺はドクターだ。一つだけ質問させてくれ。今年を覚えてくれ。」

「今は××年××日ですけどそれがどうかしましたか？」

「すまん、涼子間違えたようだ。」

「何を？」
首をかしげるが

「時代だよ。時代、今は西暦2000年代じゃない。それより8000年以上前、紀元前6000年と少し前だ。ミスッタ……」

「ミスッタじゃないわよ。」

と涼子はジト目で見てくる。ジト目いいよね。好きなんだよ。

「ずっとその顔で頼む。」

「変態」

ひびく……

「お話し中よろしいかしら？あなたここにどうやって来たのかしら？」

「この箱に乗ってだけど？」

「こんな物でできるはずがないでしょう。え〜と、ポリスボックスですってね。」

「すまん涼子、中で待っていてくれ少しかかりそうだ。」

「ええ、わかったわ。」

「あなたたち下がってなさい。」

「しかし、「大丈夫です。スキャナーに武器の反応は無かったですよ。」

「わかりました。」

しびしびといった感じで軍服の男たちは部屋を出ていく

「では、話の続きをしましょうか。こんなものでここまで来れるわけがない。此処は地下25階、それにこの町の外周200キロに亘って能力によるシールドが貼られていて外からは入れないわよ。ドクター？」

「俺が来た方法はそんな単純にシールドを突き破ったとかそういう物理的に来たというのとはすこし違うな。簡単に言うなら空間転移かな？」

「そんな……いや信じましょうそれ以外にここに来る方法がない。でも、どうしてこんなところに？」

「ここに来るつもりはなかった時代を間違えたんだ。もともと今から数えて8000年後に行くつもりだったからな。」
「まただよ（呆）前は世界を今回は時代だ。もう、間違えるのは必然なのか？」

「時代？あなたの話から推測するとこの青い箱は、時間と空間を移動できるように聞こえるけど。本当なの？」

「ああ、俺はあなたからすればタイムトラベラーだ。」

「こんなバカな話があつてたまりますか。いくら私でもタイムマシンなんてものを作るとすればものすごく大掛かりな装置になる。それに空間移動まで？中を見せてもらってもいい？」

「ああ、いいぞ。」

ガチャ

「な、何よこれ、外見と中が一致しないじゃない。ちょっと待って理解するから……」

「そっぴやえーりんって自他ともに認める天才だったな。だからこそ……」

「おい、やめておけここを理解すれば頭がおかしくなるか死ぬぞ」
「此処はあのターデイスを超えるんだタイムボルテックスならぬワールドボルテックスか？があるんだからな。」

「そうさせてもらつわ。理解しようとするだけで頭がおかしくなりそうよ。」

「あ、話は終わったの？」
涼子が訊いてくるが

「まだだ。おい、そうぶて腐れるなよ。こここのことはこの時代の人間に聞くのが一番だぞ。」
そう言ったら少しは納得したようでパソコンを弄り始めた。

「で、あなたたちはどうするの？このまま8000年後まで行くの？」

「いや、少しだけこの時代に、いようと思う。で、一つ提案だ。少しだけ君の家に泊めてもらえないか？」

「いいけど、あなたはその対価に何を私にくれるのかしら？」
えりりんが少し期待した目で見てくるので

「これを見せてやろう。」
と言っているコートの内ポケットからペンのようなものを取り出す。あ、言い忘れてたけど今の服装は俺は10代目ドクターの服装で涼子が黒リボンが真ん中にある私服である。あのターディスの山のような服から選んだ。服で何が変わるのかと思っていたが全然違うな。涼子可愛いもん。あ、話がずれた。

「これは、ソニックスクリュードライバーだ。」
今まで使いたかったが使いようがなかったしな

「どんな使い道？」
えりりんが玩具を見つけた子供のように目を輝かせる。何で俺が会った女の子はみんなこんな目をするんだ。好きだけどねこんな目する人は。

「ドアを開けたり閉めたり、それに物を壊したり直したりいろんなことができる。これを応用すればいろんなものができる。」

「これはいつの時代の？」

「此処の歴史が俺の知ってる通りならばこれは今から1億年後以上後の物だが？何でそんなことを？」

「ここで私がこれをもらってしまえば歴史が変わるんじゃないかと思つて「いや、君ほどの天才ならすぐにこれぐらい作れるよそれが少し早まつたぐらいで変わる歴史なんて微々たるもんだよ。」

「じゃあ、ありがたく研究させてもらうわ。」

「ああ、終わつたら返してくれ。それはもう作ってないんだ。工場は今はバナナ園だ。」

「何でバナナ園？」

「なんでそんな不思議そうなんだ？」

「美味しいじゃないか、バナナ」

「何か釈然としないものがあるけどまあいいわ、これからよろしくね。ドクターそれに「涼子よ。」「涼子」

「なんでそんなにメンチ切つてんですか？いや、恋愛フラグはねえよ。勘違いされては困る。涼子からはあの奇襲の失敗した理由だしえーりんからは実験材料として見られてそうだしね。こええ……」

「こちらこそよろしく永琳」

てなわけで永琳の家に居候させてもらうことになった。あの後聞いた話だとこの都市は穢れと呼ばれる人間の寿命の原因からシールドで守ってるらしい、でも、科学力だけなら21世紀の地球とそう変わらないようだ。

「じゃあ、なんで俺は戦ってるの?」

何でこうなるの?まただよ。後ろにはぼろぼろの永琳、はあ、前の世界の奴の言葉を借りるなら

「やれやれ」

く!

次回に続

天才（後書き）

ソニックドライバーはここで出さないと使い道がなくなりそうだった。次初妖怪です。感想よろしくお願いします。

妖怪

てなわけで、ここに来た日から、一週間ぐらいたった。その間涼子は、俺と町を探索したり、図書館で妖怪の動画を見ていた。あの目の輝かせようはビックリだな。で、俺はえ〜りんとソニックドライバーの改良したり霊力やら妖力やらの講義を受けたりしていた。知識としてはターデイスのお蔭で分かってても実物を見るのは違うね。やっぱりえ〜りんは本物の天才だった。ソニックドライバーだけでソニックブラスターやらソニックキャノンやら作ってたしそれに、素粒子ガンまで作ってた。軍隊と戦えるって受け売りやめようかな。

・・・

「お〜い、ドクター？どこにいるの？」

ターデイスの中で永琳が言うが異常に広いターデイスの中では聞こえない。

「お〜い」

あ、永琳だ。

「何だい？」

「ああ、そこにいたの、今日シールドの外に出て調査をするからついてきてくれない？」

「調査？」

「そうよ、穢れの度合いを調べるの、いまこの都市の住民は月へ移

住する計画を進めてるのそのためにどのくらい地上に穢れがたまっているのか調べたいのよ。」
「やっぱ、月へ移住するんだ。それと同時にまた飛ばう。」

「わかったよ、涼子は……今日も図書館が、此処でも読めるのになんでわざわざこの町の図書館使うんだろ。いいや、今日も帰ってくるのは遅いだろうし、じゃあ行こうか」

涼子の奴長門みたいになってるな。親と一緒になら子も似るってか。

「ありがとう。一人で行くのは心細かったのよ。」
「ということがあり」

「さあ、出発だ！」

「テンション高過ぎない？」

「いいのー！」

「じゃあ、これを使って二手に分れて測定しましょ」
「言いゴツイ機械を渡してくる。機械自体は21世紀の物とほとんど変わらないのね。」

「じゃ、二時間後に町のゲートで集合ね。」

「妖怪とかいるんじゃないのか？大丈夫か永琳？」

「私はこう見えても強いよ。」
「いい力こぶを作る。全然強そうに見えない。」

「何かあつたら行くから」

「大丈夫だって、心配性ね。」
「言い笑って歩き出す永琳。」

「大丈夫かな？」
「心配するんじゃない……すればフラグになるからね！」

「へえ、こうなってるんだ。」
「穢れは町の中を5として月が1以下シールド外が多いところで30以上低いところでも20ぐらいなんだな。」

「これならすぐに測定終わりそうだな。」
「早く帰って寝たい……俺の好きなことは1、旅をすること、2、寝ることだ！」

ピピピピピ

「最後の測定終りわりつと」
「じゃあ、帰ろう！」

「で、何でおれの方が早いのかねえ、門番さん」
「この門番さん、あの初めの時の軍服の一人で二度目にあつたときも
のすごく警戒してきたけど永琳のおかげで今はよくしゃべる。この
町の常識とかは正直永琳とかよりわかりやすい。永琳は天才だから
か少しずれてるからね。」

「今日は誰待ってたんだ？涼子ちゃんかい？それとも永琳さんかい？あんな美人と付き合ってたんな裏ワザ使ったんだい？」

「おい ふうす ミス おい 何勘違いしてるわけ？付き合ってる？世界がひっくり返ってもあり得ねえよ。で、待ってるのは永琳だ。」

「永琳さんならあなたと出て行ったつきりだよ。考えてみれば少し遅いね。見に行ってきたらどうだい？」
ほら、言わんこっちゃない。

「ありがとう。じゃあ、行ってくる。」
と言い全速で駆け出す。

「なんで、こんなに面倒なことになるんだろうか。」

さあ、ターディスプレイまで戻ろう。

「此処なら探せるはずだからな」
パソコンを操作して永琳を探す。

くそ、範囲が広すぎる。どうやって探そうか……あ、永琳は俺のソニックドライバーを持ち歩いてたな。あれの信号を……見つけた。此処から南西へ34キロ

何でこんな遠くに？メインスクリーンに移そう。

「なん……だ」と

いやいや、ネタに走っている場合じゃない。永琳は、今えくと鬼かなと戦ってる。

あの鬼強いな、涼子といい勝負じゃないか、てことは、ここじゃ最強クラスってことか……。永琳じゃ少し辛いかもな、正直永琳は、いくら強いといっても後衛タイプだからな、あんな前衛バリバリのタイプには、さすがに押されてるな。

「よし、行くぞ。」

そう言っただけでターデイスを作動させる。ポリスボックスが徐々に薄くなり消えていく……。

涼子SIDE

「最近あいつが私に構ってゲフンゲフン、私の答えを見つけるのを手伝うんじゃないの？」

と独り言をつぶやきながら図書館の個人用のパソコンのモニターを見ている。

ギューーン！ギューーン！

「あれ？あの音って……。ち、ちよつと」

と言い猛スピードで図書館から出て永琳の家へと戻る。

実にここまで20秒……。早すぎ！！

「どこ行くよ……。」

と消えていくポリスボックスを見つめながら呟いた。

SIDE OUT

永琳SIDE

「さあ、ここまで見たいだな、人間」

と鬼？の妖怪が迫ってくる。

やっぱりドクターの言った通り一緒に行けば良かったのかしら？いまさら言ったところでしょうがないわね。でも、まあ、いいわ。私が死んでもこの都市は月へ行くわ。ドクターはこの未来を知っていたからああ、言ったのかしらね？

鬼が妖力で作ったエネルギー弾を腕から打ち出す。

でも、もう遅いわ。じゃあね、涼子、ドクター

ギュイーン！ギュイーン！

この音は？

SIDE OUT

着いたようだな場所はちょうど鬼と永琳の間

ガチャ

「これからは俺がお相手しよう。」

「おい、永琳ターデイスに入ってる。」

「で、でもあなたひと」「大丈夫だ。接近戦なら負けはしないさ。」

「わかったわ。でも、死なないでね。」

「俺も死にたくはないからな。ま、俺はまだ死なねえけどな文字道理。」
「アブノーマル」
「そう言い異常を全開にする。」

「消えた？ま、別れ話は済んだか？じゃ、始めようか。」
鬼に気づかれる前に後ろに立ち本物の日之影がやったように、はで
きないので首を持って地面にたたきつける。

「てめえ、は？」

此処はこつ名乗るべきだろ

「元、英雄」

次回へ続く！

妖怪（後書き）

次戦闘です。涼子をどこで一度離脱させるか迷います。
では、感想よろしくお願いします。

十二の試練へゴットハンド

「元、英雄」

そういい、鬼と拳を打ち合う。

「拳破拳破、拳々破アー」

初めから飛ばさないと少しまずい……正直こいつは会ってみてわかったが涼子よりも格上だ。

「痛つたいな。今度は、こつちからだ。」

という形でダメージはあるようだが致命傷には至らない。まずい、非常にまずい……

てな感じで一進一退といった感じで二時間以上も戦い続けている。

80

どうすればいい、やっぱり至近距離での連続で拳破をかますしかないようだな。

「殺り合つてるときに考え事か？」

ズゴオオオオン

「へへ、やべえなこれは。」

油断したぜ。拳破は後8発が限界だな。

「じゃあ、ここでお前を殺してあの箱の中にいる女を殺せば終わりだな。」

ターデイスの中は安全だろう。何せあのドアはチンギス・ハーンの騎馬軍団の攻撃でも敗れなかったんだから。

「さあ、来い最終ラウンドだ！」

そう言い、指を鳴らし「パチン」ターデイスのドアを閉める。

「もう立つのもやっとなのに何を言うかと思えば」と勝利を確信している鬼が言う。ここで、一つ目はここで捨てることになりそうだな。

「なら、来いよ。さあ！トドメもさせないのか？」

こんな挑発は普通人間相手には聞かないんだがな。鬼だからこそこいういのは聞くつてもんだ。鬼は嘘を嫌うからな。

「ああ、そこまでのいうのなら……行くぞ」

と言い放った瞬間俺の右胸に鬼の腕が突き刺さる。

永琳SIDE

助けに来てくれたのはいいけど何やってるのかしら？あ、このモニターで見れるみたいね。ここをこうしてつと映ったわ。

戦ってるみたいね。すごい……彼、接近戦なら最強ね。霊力や気で強化している訳でもないのに妖怪とそれも最強レベルの妖怪と勝てないまでも渡り合ってる。ほんとに彼人間かしら？

二時間経過……

あの二人？いつになったら決着がつくのかしら？終わら『ズゴオオオオ』な、何？ドクターが吹き飛ばされてるじゃない。

煙が晴れる。そこには満身創痍ながらも立っているドクター

だ、大丈夫なの？」「なら、来いよ。さあ！トドメもさせないのか？」「
ちよつと何挑発してるのよ！

「ああ、そこまでいうのなら……行くぞ」と鬼が言う。

「ドクター！ドクター！」と叫びながらドアをドン、ドンとたたく
が開かない。

「何で開かないのよ！」

ザクツつと言う音がしたと思ったらドクターの右胸に鬼の腕が突き
刺さっている。

「いやあああああああああああああああああああああああああ
ターデイスに永琳の悲鳴が響き渡った……」

S I D E O U T

「終わったか……」
と鬼が呟くが、

「楽しかったか？なら、終演だ。」

と俺は言い全力で拳破を鬼の頭に向けて撃つ。

「ああ、楽しかったぞ……」

と言い鬼は頭が吹き飛び動かなくなる。

倒したか？あ、アテネの奴再生後はタイムロードと一緒に体が安定しないように十二の試練ユットハンドを改悪しやがったな。

ああ、もうヤバいな……。落ちるぞ。でも、その前に「パチン」ドアを開けないて……。

永琳SIDE

「そんな……。私のせいで……。モニターを見つめながら虚ろな目で呟く。」

「これはタイムマシンなんですよ！戻れ！戻れ！戻れ！」

いつもの永琳ならば起動ぐらいはできるが今は完全な錯乱状態、不可能だ。

「なにこれ……。」

ドクターの体から光が飛び出る。それは永琳では理解できない。この時代にはなく、もしかするとこの世界では生まれないかもしれない、「幻想」《魔法》この世界の魔法とは似て非なるもの本物の奇跡タヌムとある世界では、それを『宝具』《ノウブル・ファンタズム》と呼ぶ。

そうしてドクターの体が再生される。

「え？……。なんで？」

キョトンとした顔で言うが理解できない。

ドクターが至近距離から攻撃し鬼の頭が吹き飛ぶ。

倒したみたいね。あ、あれ？なんでドクターは倒れそうに「ガチャ」
ドクターが指を鳴らすと同時にターデイスのドアが開く。

「開いたわ！ドクター！」

と言いつターデイスからポロポロの体のことを忘れドクターのところ
に駆け出した。

S I D E O U T

あ、永琳だ。後は頼もう。

「永琳、後は頼んだ。ターデイスを作動させてくれ。君ならできる
だろう。」

と言いつ俺は意識を失う

「ええ、わかったわ」

と微笑みながら言ってくれる。

永琳は俺をターデイスの中まで運び、その頭で起動させる方法を探
る。のちに月の頭脳と呼ばれる人間だからできることだった。

ギューオン！ギューオン！

「これでいいわね。」

と疲れ果てて眠る。

涼子 S I D E

消えてからも二時間以上、もう戻ってこないのかしらね？この世

界もいいところだけどずっといるには向かないわ、だから、戻ってきなさいよ。ドクター……………

ギューーン！ギューーン！

消えたはずのポリスボックスが戻ってくる。涼子は近づきドアを開けるとそこには……………ボロボロの永琳にドクターは死んだように眠っている。

「何してたのよ。」

次回に続く！

十二の試練へゴットハンド (後書き)

十二の試練一回目の使用です。正直どこで死なせるかを考えないと使えないので使い道が少し難しいです。話は変わりますがそろそろドクターフーの3期が日本でやりますね。楽しみです。では、感想よろしくお願いします。

月へ

「何してたのよ。」

涼子が二人に聞くが眠っており誰も答えない。

「はあ、何で私がこんなことをしないといけないのよ。」
と言いながら永琳を背負い病院へと連れて行く。

俺は？

病院

「何があつたのよ？」

涼子が回復した永琳に聞く

「かくかくしかじか」

「四角いムーブってわけね。」

これで理解できるのがご都合主義だね。涼子は理解したようだけど永琳はあの回復というか復活のことは話さなかったようだ。自分が理解できない現象はとことんきらいなようだ。

「で、ドクターは？」

「あ、忘れてた……」

ターデイス内部

「俺頑張ったのに扱いひどくね?」
仕方ないのよ。というアテネの声が聞こえた気がした。

「やっぱりここね」

涼子が言う。あなたが忘れたんじゃない?」

「そうね。」

永琳があれについて教えてほしいそうぞうずずした感じで話す。2
4時間以上たつてからにしてくれ

「俺はまだ、動けん再生サイクルに入ってまだ早いからな。少し肩
を貸してもらえるか?」

「ええ」

永琳が肩を貸してくれる。

「君はもう大丈夫なのか?」

「あなたの貸してくれたソニックドライバーでこの都市の技術は2
世紀は進んだわよ。あのくらいの傷は直ぐに治るわ。」
すこすぎだろ。

「じゃ、来るなら、二日後ぐらいに来てくれ。」

と言いつァーデイス内部の居住スペースへと行くために螺旋状の階段
を肩を借りながら降りる。

居住スペース

ベッド二は俺が横の椅子には永琳がいる。なぜ?帰る用に言ったる

「なぜ居るのって顔してるわね。あれについて教えてもらうまでは寝かさないわよ。」

最後のところだけなら興奮するのになぜこんなに寒気がするんだ・
・
・
・

「あれは十二の試練^{トハンド}だ。あれのおかげで俺を殺すには12回殺さないと死なない。文字道理今は死なないだ。」

でも、Bランク以下の攻撃無効化するらしいんだが、無効化されなかつたな。アテネの奴ほとんどタイムロードと変わらなくするため改悪しすぎだろ。

「そんな、あなたは非常識の塊ね。でも、あれは科学というよりは魔法の類だと思っただけけど」
「やっぱりそこに気付くか」

「あれはターデイスヤソニックドライバーといった類の超未来の科学というわけじゃない、永琳の言った通りこれはとある世界で「宝具」と呼ばれているもので、俺の体自体がその「宝具」だ。ずっと発動してる今この瞬間もな、そして「宝具」とは、その世界での幻想^{ファンタズム}そのものだ。もしかするとこれから何千年から後生まれるかもしれない。だが、ここじゃあ消え去る。廃れていく欲しいなら何千年か待つんだな。」

「だからスキャンしたときあなたが微弱な何かの反応を帯びていたのね。」
「そうだったのか。自分じゃ発動しているのが普通だからわからないしな。」

「だいたいわかったわ。じゃ、また二日後に会いましょ。」
「
と言いますスタスタと歩いて出ていく、ここまで来たのならもう少し喋

ってからでもいいのに

永琳SIDE

「顔赤くないかしら？」

永琳も女の子、それも年齢は20もいかないような女の子だ。死にそうなところを颯爽と助けてくれてそれも命まで使ってた。そんなことされればどんな女の子でも恋に落ちる。

「しゃべりたいからって無理に話したけど大丈夫かしら？聞いた話では大丈夫みただけど、考えるのはやめましょ、次に会えるのは二日後ね。それまでに、話すことを決めないね。」
永琳は天才だが、恋に関しては全くと言つての盲目である。

SIDE OUT

二日後、永琳と涼子が来た。

「調子はどう？」

涼子が尋ねるので

「ああ、最悪だ。」

「ち、ちよつと大丈夫なの？あわわわわ」

永琳がものすごくあわてだしたので

「大丈夫だよ。「冗談冗談」

「ならいいわ、一つ伝えないと……明日月へ転移するわ。 3

日前の調査の結果から穢れの増大が確認されたわ。あの鬼の強さも
そういままでなら私でも十分に倒せるレベルの強さしかいなかった
でも、あの鬼の強さは異常だったわ。だから計画を前倒しすること
になったのよ」

「OK、話してくれてありがとう。じゃあ、俺たちも出ていく準備
をしようか涼子」

「え〜妖怪見てないわよ〜」

「そういうな、この時代以外でも妖怪はいる。次の時代で見ればい
い。」

「わかったわよ。」

「今聞いていた通りだ。」

「また、会えるの?」

そんな捨てられた猫のような目で見ないでください。

「ああ、君が生き続けている限り定期的に会いに行くことにするよ。」

てなわけで準備は進む。

正直俺たちは生活自体はターデイスの中で行なっていたからな。準備はない。

永琳の家から出てこの都市を見上げる。

来てからまだ2週間ぐらいしか経ってないのに技術自体は2000年
以上進んでる。ビックリだな。

そうして当日

全部でロケットは十二基発射するようだな。あ、今十一基目が飛んだな。この分だったら今日中に終わりそうだな。

「これでお別れね、ドクター」

「いや、そういうわけじゃないんだけどね。」

「間違えたわ、また会いましょ。」

「ああ、また会おう。」

「私も今度は月でゆっくりしたいわ。」

俺たちは今ロケットの発射台の下搭乗口でしゃべっている。乗り込むのは永琳が最後だ。俺たち喋っているからな。今ターデイスはここまで運んである。準備万端だ。

「では、今度こそ、ドクターまた会いましょ。」

「じゃあな」

「最後に言い忘れていたわ、I love you」

「え？何？」

ウィーン ガチャン

訊き直す前にドアが閉まっちまった。あ、やばい爆風に巻き込まれる。早く入ろう。

ガチャ

朝倉が不機嫌そうな顔で聞いてくる。

「で？返事はどうするのよ。」

何でそんなに不機嫌そうなんだ、お前……

「わかんねえ、もう少し旅をして答えを見つけてから会うつもりだよ。」

「優柔不断ね」

「仕方ないだろ。大事なことだ。」

「無事に飛び立ったみたいね。」

「でも、あれは？」

あれは……

「あれが妖怪ね！また画面越したわ……最悪」
でも何をつて……マズイ

「妖怪から何か出たわよ。」

「あいつ妖力で球状のエネルギー弾を作り出しやがった。あれがエンジンに当たれば出力が足りず地球に逆戻りだ。」

ガコン、ドオゴーン

糞間に合わなかったか。じゃあこの船で……

永琳SIDE

「安全に出発できましたね。永琳さん」

「ええ、よかつたわ。」

「でも、あの方とはあれでよかつたのですか？
横の船長が尋ねてくるが」

「な、何であなたが知ってるのよ！」

「何でって永琳さんあなた通信用のマイクつけっぱなしでしたよ。
ロケット中で大騒ぎですよ。」

「うにゃああああああああああああ「永琳さん！高速でエネルギー
ー体が接近中です。大きさは五十メートルほどの大きさでこのまま
の軌道だと1番エンジンに直撃、出力低下により地球へ墜落します。」

「ロケットを反らしなさい。左へ30度」

「無駄です。間に合いません。」

ガコン、ドオゴーン

「一番エンジン損傷、出力低下により地球へ墜落します。」

ギョオーン！ギョオーン！

何処かで聞いたような音だ。

「なぜか、墜落しません。「ロケットの皆さん。こんにちは！こちらターデイス号だ、月へ参ります。」
「やっぱりあの人がね。最後の最後までやってくれるわね。そうじゃないわね。私の惚れた男じゃないわね。」

SIDE OUT

月へ12番ロケットを送った後

「朝倉はどうするんだ。このまま旅を続けるか？」

「いいえ、一回降りさせてもらっわ。長門さんからメールが来てたから」

「長門からメール？」

「そう聞くとなぜかターデイスに設置されてある永琳特製のパソコンに指尾さす。」

「ええ、メールよ。手伝ってってね。」

「この時期で言うか時間の進み方が違うから時系列がわからないけどたぶん消失だな。」

「わかった、送るよ。よし行くぞ」

ギューオーン！ギューオーン！

「おい、涼子着いたぞ。でも、少し座標がおかしいぞ。ここでもいいのか？」

「ええ、いいのよ。」

「12月18日午前3時だ。北高前、気を付けてな。」

「わかったわ、また会いましょう。」

「ええ。」

ガチャ

ギューーン！ギューーン！

ポリスボックスは消えていく。あの北高前から。

「カレー」

何でここにいるんだ長門よ。そして、バグが発生した状態でなぜ覚えてるんだ。

さあ、妖怪の世界に戻ろう。次は諏訪大戦だな。

次回へ続く！

月へ（後書き）

永琳は月へ涼子は消失へと行ってもらいました。涼子がメインヒロインになるのは消失終了後です。そして次は諏訪大戦へ感想よろしくお願いします。

俺の居場所

ギューオーン！ギューオーン！

「此処は、諏訪湖の近くの村はずれか。……」
「じゃあ、諏訪子《ロリ神》の所に旅の安全祈願に行こうか、でも、いままででは、旅は安全じゃないけどな。ここで安全になるとはおもえないけどな。」

「服はこのままでいいか。じゃあ、行こう！」

ガチャ

そして、歩くこと2時間……非常に村の皆さんに変な目で見られた。ひどい……。それもそうだと思うけど、だって、今も前と変わらず10代目と同じ服着てるから服が合わない。

それにしても階段長すぎるぞ、何なんだ此処……

「もう30分だぞ……」

「ここに何しに来たの？」
幼女が話しかける。

「旅の安全祈願にね。ものすごく長い旅になるから、死ぬかもしれ
ないし、どうなるかもわからないからね。」

「そうなの、じゃあ、私も願ってあげるね。」

と言い幼女は笑う。断じて俺はロリコンじゃない。だが、こんな笑顔も悪くはない。

「ありがとよ。」
「
と言いき出す。」

5分後

「やっと着いたか。」
「
神社も長さに比例して立派だな。」

「あ、参拝客さんですね。こんにちは。参拝ならこちらですよ。」
と、巫女さんが言ってくる。巫女さんここにもいるんだな。早苗さんの先祖が何かかな？

「ありがとうございます。」
と聞きながらも本殿へと歩きだす俺

本殿へとあと少しとなったとき巫女さんが気付く
「そつちじゃないですつてば〜」
結構ほんわかした人なんだな。

「で、ここの祭神が俺に顔を出したかだ。それを聞きに俺はここま
で来た。」
「
そう言つと巫女さんが

「諏訪子様！なにしてるんですか！勝手に外を出歩かないでくださ
いって言ったでしょう!」

「ごめんよ〜久しぶりに面白そうなのが来たから少し、少し見にに

行っただけじゃないか」
予想よりも中身も幼女なようだな。

「あ、その君、幼女とか思ったでしょ！」
急に襖から顔を出し何か言ってくるが

「諏訪子様！まだ説教は終わってませんよ！」

「ごめんよ、夏苗」

あの巫女さんは夏苗さんというらしい、早苗さんまで後何十代も名前は苗が付くのだろうか。そう考えればすごいな。

「すみません、諏訪様が……」

と夏苗さんが謝罪を仕切りなし言ってくる。

「大丈夫ですよ。夏苗さん」

「何で私の名前を？」さつきその駄神が言っていましたよ。」

何か横の神が「私は駄神じゃないよ！」とか言ってくるが、一参拝客に姿を見せる祭神なんて聞いたことがないぞ。

「で、あなたはいったいななんですか？普通の人は諏訪子様のことは見えないはずですが……まさか、妖力は感じませんが妖怪？」

と言い終わると同時に符を構えるが

「違うよ、妖怪だったら私ができるしここに入れたりしないよ。それより、君は穢れが少なすぎる。人間だとすればありえないほどに。あなたは、何なの？」

諏訪子が真剣な目をして聞いてくるので

「俺はドクターだ。ここで言う医者……いや、陰陽師とでもいうべきかな。」

「このころはまだ医者はいないから考えると陰陽師やら僧侶ってとこだが今の見た目を考えると陰陽師だろう。」

「どくたー？変な名前、いや、そんなことじゃないんだよ。あなたはどこから来たの？この国、いやこの星？この世界じゃないよね。」
「変に鋭い駄神だな。さすがは、神様ってわけだ。」

「そう、俺はこの世界の住民じゃない。世界を旅してる。」

「そんな、バカな……」

夏苗さんが頭を抱えて唸ってる。普通はこうなる。神だからこそこの反応だ。

「じゃあ、ここにいなさい。」

諏訪子が、言う。

「あなたの望むことぐらいわかるよ。あなたは旅の安全よりも居場所を求めているよね。あなたが昔何をしていたかはわからないけど、あなたの居場所はどこにもない。」
「そうなのかもな。」

「なら、此处が俺の居場所になってくれるのかよ。」

「うん」

即答する諏訪子

「なら、居させてもらうよ。なんせ、ここは俺の居場所だからな。」

「そつだよ。少しは、ここで住みなさい。」

「諏訪子様なに勝手に決めてるんですか！もういつも諏訪子様は……」

といった感じで俺はここに住むことになるとはな。ターデイスを此処に運ばないとな。

数日後……

夏苗さんに手伝ってもらいターデイスを此処まで運んだ。すごいんだな。永琳には霊力の座学しか教えてもらってないからわからなかったが、実践はこんなもんだったんだな。軽くターデイスが浮かんでたよ。

「ははあ〜」

今や、なぜかターデイスも信仰の対象だ。この時代じゃターデイスをは目立ちすぎるな。人の目につく場所に置いたのが間違いだったな。

「今や、この青い箱も信仰されてますね。私はこの箱の巫女になるんでしょうか？」

いや、知らないよ。

「そんなの私がさせないんだよ。駄目だよ。こんな箱には私の夏苗は渡さないよ。」
いつから諏訪子になったんだ。

「私は諏訪子様の巫女ですが、あなたのものではありません。」
「言い諏訪子の頭をお祓い棒でたく。」

ドン！

「あーっ、夏苗がいじめるよ、どくたー」

「お前のせいだ。」

ドン！

「みんなでいじめるよ」

と諏訪子は本殿へと行ってしまふ。

「楽しいな。」

「ええ、楽しいですね。」

と二人で笑う。

「うっひどいよ」

聞こえてたみたいだな。こんなのもいいもんだ、楽しい日常。

だが、こんな日

常は続かない。

次回に続く！

俺の居場所（後書き）

早苗さんの先祖つてずっと苗が付いた名前なんでしょうかね。それが70代以上続いているなら考え付く方がすごいと思います。では、感想よろしくお願いします。

戦の前

そうやって、夏苗さんと一緒に諏訪子を弄って遊んだり、一緒に仕事を手伝ったりして過ごして一週間ぐらいたった時だった。

「どくた〜ご飯だよ〜」

いつものように諏訪子が呼ぶ。

「わかった。今いく」

と正しいいつもの本殿の食卓を三人で囲み食べる。神社の本殿つてもっと神聖な場所じゃないのか。俺や夏苗さんがここでご飯食べてもいいのか？

「此処の祭神がいつって言うてるんだからいいんだよ。」

俺が会った神ってこんなやつばかりだな。一人は神じゃないけど

「いいんですって私も生まれてからここで育ってますから。」

「そーなのか」

この時代にはもうルーミアはいるのかな？

「む、何か違う神がこの国に入ってきてるね。少し行ってくるよ」

「すごいな、俺でもターデイスを使わなければそこまでわからない。」

「

「そりゃあね、自分の国ぐらい守れるようになってない」と

と久しぶりに真面目な顔で言うので

「にゃくめくろよ」

頬をムニムニと揉む。やわらけえ、楽しいな！

「もう！行ってくる。」

「大丈夫か？ひとりで」

「戦おうとはしてないみたいだよ。してたら入った瞬間からやってくるよ。」

「じゃあ、行ってらっしゃい。」

二時間後

「どくろくしよ」

本殿の居間で諏訪子がくつついてくる。

ドス！

「どくろくした？何があったんだ。」

体から引き離しながら言う

「大和の神々が攻めてくるんだって」

「お前強いんじゃないの？」

「強いけど私とミシヤクジ様しかいないんだよ。数が負けてちゃ負

「けちゃうよ。」

「それはいつなんだ？」

「七日後、だって。それまでにどうするか決めろって戦つか降伏するか……」

「明日、どれだけ強いか見せてくれないか？それからでも遅くはないだろ。」

そして、

「さあ、行くよ、どくたー」

開けた草原で俺と諏訪子が向き合う。夏苗さんは横で座ってみている。危なくなったら止めるんだと、

「ああ、来い神の戦いというものを見せてもらおう。」
「アフノーマルと言いつつと同時に限界まで薄めている異常を発現させる。」

「どくたーが消えた？」

諏訪子が周りを見回し鉄の輪を乱射する。

だが、存在を認識できないので当たらない。

「うーあたらないうー」

「今度はこっちの番だ。」

と言いつつ相手に相手の間合いまで距離を詰める。そして、数発だけ拳破を叩き込むと

「ぐへ〜」

と近くの岩に激突しそのまま気絶した。

「夏苗さん、諏訪子大丈夫かな？」

「多分大丈夫だと思えますよ？」

何で疑問形なんだ？

「まず、運ぼうか……」

本殿

「神といえどこんなものか……あの時の妖怪が強すぎただけか」
寝ている諏訪子の横で呟く

「あの時っていつのことなんです？」

「はるか昔さ、俺からすれば数日前のことだが、君たちにとっては
6000年ぐらい前かな？」

「6000年！？そんな昔に？何をしに行ってたんですか？」

「間違えてだよ。あの青い箱はそんなに正確じゃないことが多いか
らね。」

「では、ここに来たのも間違えて？」

「いや、ここには自分の意志で来たよ。この後起こる大和の神々と
の戦いを見物しにね。」

「なら、あなたはどちらが勝つてどうなるかも知っているんじゃないんですか？」
「やっぱり頭いいみたいだな。」

「ああ、知ってるけど言わない。未来を知ったところで大きくは変わらないし、第一未来がわかるなんて面白くないだろ。」

「そうですね。結果を聞いたところで何も変わりませんからね。」
「そうだな、あの強さなら大体の神なら鉄の輪だけで倒せるだろ。結局は負けるが、八坂の神様との一騎打ちにしてやりたいものだな。このくらい介入しても大丈夫だろ。結果は変わらないし変わるのは過程だけだ。」

諏訪湖

「ミシヤクジ様とやらいるんだろ。少し話したい出てきてくれんか。」

「今湖のほとりに立ち、ミシヤクジ様とやらの協力を取り付けに行っている。さすがにフォースフィールドで隔離するにしても残りの神を俺一人で相手にするのは無謀すぎる。」

「何だ……貴様は……」

湖の中心から大きな白い蛇が現れる。

「やあ、俺はドクター、君ぐらいの神になると俺のことは大体わかるかな？」

正直諏訪子はまだ誕生して100年と少ししか経ってないから能力も十全に使いこなせてない。使いこなされたら俺なんて目じゃないだろう、なんせ森羅万象の地を操れる「坤を創造する程度の能力」

だからな。

「貴様のことは諏訪子から聞いている。それ以上のことは少ししかわからん。」

この神様でも限界があるのか？今度天照大神に会いに行ってみよう。この時代ならまだいるだろうし

「一つ頼みごとがしたい。諏訪子そして、ここの民のためだ。」

「一つだけ条件がある。貴様、私と戦え。そして、貴様の力を見せる。」

力試してか……

「よし、行くぞ！人間の力見せてやろう。」

翌日

ガン、ガン

「はーい、どういたしましたか？」

本殿の入り口をたたく音がする。

ガラ、ガラ

「え？どうしたんですか！？どくたー？おーい」

「大丈夫だよ。見た目ボロボロだけどそうでもない。普通の人より

頑丈だからね。」

「でも、どくたーがここまでやられるなんて……妖怪ですか？」
夏苗さんが警戒を強めるが

「妖怪じゃない、ちよつとミシヤクジ様と戦ってきただけだよ。あ、これ諏訪子には内緒ね。」

「ちよつとじゃないですよ！？こつちに来てください。」

とグイグイ引つ張られ霊力で手当てされた。霊力万能すぎる。俺も使いたいのが前に永琳に

「あなたの霊力はほとんどゼロに近いわね。こんなの一秒でも浮くだけで気絶よ。」
とか言われてしまったのでやめておこう。

そして、いつものように食卓を囲む。

「どくたー！昨日はどこ行ってたの？いくら強いからって妖怪もいるんだよ。気を付けないと。」
でも真相を知っている俺と夏苗さんは苦笑いして諏訪子を見る。

「ど、どうして、そんな目で私を見るのさ。もくまた、二人して私をいじめるよ。」

「さあ、もう時間がないぞ。真面目に諏訪子、どうするんだ。戦うのなら手は貸してやる。降伏するとしても、俺は何も言わない。お前の収めている国だ。未来はお前が決める。」
答えは分かっているけどもここで本人の口から聞いておかないと、部外者が勝手に進めてもいけないしな。

「私は戦うよ。此処の民のためにも」
そう諏訪子が言うので

「じゃあ、俺も手伝ってやろう。」
さあ、本格的に諏訪大戦の開始だ。

次回へ続く！

戦の前（後書き）

諏訪子やら加奈子っていう神っていつ生まれたんでしょう？しつかりと書かれていないので分かりませんが、適当に決めさせていただきます。

では、感想よろしくお願いします。

時の王

さ、準備は万全だ。今日、大和の神が来るらしい。今俺はターデイスのモニターで、大和の神々を見ている。強さはそこまでないにしろ大軍勢だな。よし、俺もそろそろ動きますかね。

数時間前

「じゃあ、私は行ってくるよ。」
と諏訪子が横にいるミシャクジ様と一緒に大和の神々との戦いに向かおうとしている。

「わ、私も、「駄目だよ。夏苗は人間じゃあ強いけど神と比べちゃ全然だからね。それに比べてどくたーは……ほんとに人間？」
一回死んで、ミシャクジ様と戦ってもまだ人間だと思っ……たぶん。

「俺は準備があるから」
とターデイスの中に入る。

ガチャ

「こんな小さい箱に入って何するんですか？」
と夏苗さんも中に入ってくるが……

「な、何なんですかこれ〜!？」
と目を回して倒れてしまった。

「まあ、予想外だがこれでいいだろ。」

夏苗さんを居住スペースのベッドに寝かしターディスプレイを作動させる。

「さ、大仕事だ。」

諏訪子 SIDE

「ミシャクジ様頼むよ。」

私ひとりじゃどうにもならない。ミシャクジ様は体を何千の蛇に分けられる。これで数だけは稼げてても大將は相手できない。だから私が相手しないと。

「任せろ。」

ミシャクジ様は頼もしいね。それにしてもどくたーは何してるんだ？まあ、あんなに強いとしても、神がこんなに居ちゃあ勝ち目ないと思っただのかな？それでもどくたーや夏苗が死なないのならそれでいいや。

本殿からあの長い階段を下り鳥居のある地点に大和の神々はいた。

「さあ、答えを聞かせてもらおうか。」

中心にいる大將だと思っ注連縄を後ろにつけた女が前に出て言うてくる。

「私は戦うよ。それが私たちの選択だよ。」

そう強く言い放つ。どくたーに言われたしね。ここは私たちが収めてきた私たちの国だから……

「よろしい、そういう選択もあるだろう。だが、ならば戦おうか。」

と大和の神々が神力を開放するが、

ギューン！ギューン！

と私と神々の間にどくたーの青い箱が現れる。こつやって現れるんだ。

ガチャ

「ちよつと待った。ちよい待ち！」

どくたーが出てくる。何しに来たのさ、死んじゃうよ……

「ここで、大和の神さんたちに提案だ。」

「貴様、たかが人間で、我々神聖な神の戦いに割り込んでくる出ないわ。」

と後ろにいるいかにも下級っぽい神様が言っている。

「さあ、その女の大將さん提案、聞かない？」

と何か言ってる他の神を無視して、大將に聞いている。

「提案って……何を言うもんだか、命令の間違いじゃないのかい？え？私と変わらない、いやもしかしたら私より大きい神力の持ち主がなんで、どくたーの言うことを聞こうとしてるの？」

「そうかもしれんな。」

とどくたーは苦笑いするが

「なぜ、そんな人間の言うことを聞くんですか！」

「見てわからないのかい！あいつの乗ってきたこの箱、神力よりも

つと高密度の力を感じるよ。もし、これが武器なら私たちじゃ歯が立たないよ。」

それを聞き、啞然とする他の神々、私だってびっくりしてるんだから。何で気づかなかったんだろ？

「では、ここは一騎打ちとしてもらいたい。ここにいる諏訪子とあなたとのな。」

「仕方がないが、了承しよう。」

「では」と言い青い箱の中に入るとくたー

「良かったのですか？」

「いいんだよ。」

ガチャ

「さあ、あなたと諏訪子はこちらに」

というので青い箱から離れたところに私たち集めて、どくたーは青い箱の中に行き、何かを作動させた。

「さあ、これで隔離は完了した。外からの乱入はなしだ。」

「ああ、わかった」

「では、開始。」

私は自分の国を守るだけだよ。

SIDE OUT

「では、開始。」

というと同時に二人は戦い始めた。

「さあ、俺たちは外を相手にしようか。」

「だが、これで大丈夫なのか？」

ミシャクジ様とフォースフィールドの中で隔離された空間で戦っている二人を見ながら言う。

「ああ、これで完璧だ。」

「おい、貴様ら！何をした。」

とまたまた下級神が言ってくるが

「君たちのいる場所と戦っている場所は完全に隔離させてもらったよ。破るならそうだね……この太陽系を吹き飛ばせばどうにかならんじゃないかな。」

地球を粉々にするほどの爆発も耐えるんだからこのぐらいだろう。

「そんな馬鹿な話があるか！」

と突っ切るうとフォースフィールドに触れた瞬間、

ボウオ

「うわああああああああああああああああああああ
とその神が一瞬にして燃え上がった。」

「貴様、何をした！」

「だから言ったじゃないですか。隔離しましたってこれは、単純な壁じゃないんです。莫大な力でできてる壁なんですよ。さっきここで戦ってる神様が言ってたじゃないですか、神力より強い何かがあると。それで壁を作ればどうなるでしょうね。」

そのほかの神も無理だとわかったのか、さっきの神のようなことはしない。

「貴様、何者だ。」

「時の王ってところだ。」

く！

次回に続

時の王（後書き）

ドクターフリーで時の王と言ったのは暖炉の時でしたかね。話は変わりますがトーチウツド面白いですね。最近見始めたのですがジャックが見れてうれしいです。
では、感想よろしくお願いします。

夏苗と未来

「時の王ってとこかな。」

「な、貴様が時間を総べているだと……只の人間に、そんなことができるわけがなからう。」

「只の人間かは、お前程度じゃわかんねえだろうが、天照大神ぐらいになればわかるんじゃないか？」

「貴様のような人間がアマテラス様に会えるわけがなからう。私たちでも会えんのに。」

「それはどうかな。」

別の神が

「貴様を殺せば、この妙な壁は消えるということだろう。」
「また妙な考えを……」

「そうか！そうだな。」

とか言いながら神々《バカ》が向かってくるので

「ミシヤクジ様準備はOK？」

「OKが何かわからんが準備はできている。」

「さあ、戦闘開始だ！」

数時間後

そろそろエネルギー切れでフォースフィールドが切れるはずだが

ブウォン

消えたか……決着は、相打ちかよ！少しだけ歴史を変えるつもりが
ヤベえほど変えちまったようだな。まあ、いいや。

「どくたく疲れた」

と諏訪子がくっ付く

「邪魔だ。で、その神さんこれからどうする。」

此処からは歴史道理になるように誘導しないと

「どうにかして信仰を分けたいと思ってる。方法はまた考えるところよ。」

「ならいいんだ。で、こいつらどうにかしてくれないか。」

と、俺とミシヤクジ様にやられた神たちに指をさす。

「このバカたちは連れていくよ。また、明日来るとするよ。それと
私の名前は八坂加奈子だからね。覚えておきなさい。」

と神々を引き摺って何処かへ連れて行ってしまった。

「諏訪子頑張ったな。」

「うん！頑張ったよ。」

「じゃあ、帰ろうか。」

と二人でターデイスに入る。

「わ〜すごいね。ここ何で見た目より広いの？」
そうか諏訪子はここに入るのは初めてか。

「企業秘密だ。」

「え〜けち」

けちでも何でも言ってくれ、俺にタイムロードの科学なんてわかるか。

「じゃあ、出発、神社の本殿へ参ります。」

「お〜！」

ギューーン！ギューーン！

「着いたか。あ、夏苗さん忘れてた。」

螺旋状の階段を下り夏苗さんが寝てる部屋まで行く

ガチャ

「あ、どくたー何でこんなところに？」

あ、夏苗さんもう起きたんだ。

「いや、夏苗さん、青い箱に入った途端気絶したからここまで運んだんだ。」

「ここはいつたい……いや、そんなことより戦いは！大和の神々と戦いは！どうなったんですか。」

「相打ちだよ。相打ち、大丈夫だよ。諏訪子は無事だ。」

「よ、よかったです。」

とへなへなとなり座り込む。

手を差し出しながら

「じゃあ、行こうか。」

俺の出した手を掴みながら

「はい！行きましょう。」

てなわけで本殿まで戻ってきたわけだが。

「よ！遅かったな。諏訪の神、そして、時の王」

何でもう八坂の神がいるんだ？

「その時の王つてのはやめてくれないか。俺の名はドクターだ。」

「わかったよ。どくだー」

「じゃあ、お二人さんは信仰の分け方でも考えてくれ。」

というと二人は真剣に話し始めるので

「夏苗さん、ご飯でも作るうか。」

「はい！」

と二人で台所に向かう。

「夏苗さん、そろそろここを発とうかと思ってる。諏訪大戦も終わ
ったしな。」

そろそろ発とう。次はどこに行くか決めてないけど。

「え？な、なんでですか！ここはあなたの家なんですよ。これからもここで諏訪子様と私とあの神様も一緒に暮らしましょう。」
夏苗さんが血相を変えて言ってくる。

「大丈夫だつて、あの箱は時間を移動できるんだよ？俺が行つてから俺の時間で1000年経つても夏苗さんの時間じゃ戻ってくるよ。きには十秒も経ってない。」

「本当ですね？」

「ああ」

嘘だが仕方ない……

そうして結局史実と同じように守矢神社に統合して信仰を分けるらしい。介入するまでもなかったな。

じゃあ、そろそろ……

翌朝

「じゃあ、消えますか。」

とまだみんな寝ているであろう。時間にターディスへと向かう。

「どこへ行くつうてのさ。」 「そうだよ。行くのなら私たちに一言言ってから行きなよ。」

夏苗さんを除いた二柱の神様が言うてくる。何で気づいたの？神様だからか？

「短い時間でも同じ釜のご飯を食べたんだよ。神じゃなくてもわかるよ。」

と諏訪子が自慢げに答える。その貧相な胸を張ってもむなしいだけだぞ。

「うっ、うるさいよー!」

「時の王つてのは本当なのかい?」
加奈子が聞いてくる。

「まあ、見ていればわかるさ。神様つてのは寿命はないんだろ。ならまた会えるさ。」

「じゃあ、行くよ。」
と言いつターデイスのドアを閉めようとしたとき

「待ってくださいい〜どくた〜」
夏苗さんが寝巻のまま走ってきた。

「どっした?」

「どっしたじゃないですよ。何で私には見送りさせてもらえないんですか。」

と涙目で言う。涙目やめてくれ。行きたくなくなるから。

「いや、決心が揺るがないように誰にも言っでなかつたんだが、この二人は勝手に来ただけだ。」

「では、私もお見送りを、行ってらっしゃい。」

「行ってきます。」

ガチャ

「はあ、もつとここにいた方がよかったかな……多分今度来たときには夏苗さんは……」
「仕方ないのかもね……」

ターデイスを作動させる。

ギューーン！ギューーン！

「はあ、しみじみするのやめだ。月へ行こうか。」

夏苗SIDE

「行ってしまいましたね……」
あの時言ったことは多分嘘だと思う。だから私はもうあの人には会えないんだろう。

「行っちゃったね。」「ああ、行っちゃったよ。」
二人が言う。

十

九

八

七

六

「どくたーの嘔吐き……」

S I D E O U T

「ターデイスを探知しました。ここへ来ます。」

「6000年ぶりかしらね。ドクター？」

ギューーン！ギューーン！

月の都市のビルの合間に古めかしいポリスボックスが現れる。

ガチャ

「さあ、ソニックドライバーを返してもらわないとな。」

次回へ続く！

一 二 三 四 五

夏苗と未来（後書き）

そろそろ10000PVアクセスは2000人に達しますね。正直0でも仕方ないかなと思いましたがこれほどの人に見えていただいて本当にうれしいです。
では、感想よろしくお願いします。

追記

申し訳ありませんが書き溜めが手違いで消滅しましたので、次話は少し遅れます。

ソニックドライバー（前書き）

10000PV達成いたしました。皆さんご覧いただきありがとうございます。
では、本編をお楽しみください。

ソニックドライバー

ガチャ

「さあ、ソニックドライバーを返してもらわないとな。でも、まずは月の都市を探索させてもらおう。」

そうして数時間月の都市を見て回ったが、技術レベルはニューヨークと変わらないレベルだったな。車飛んでたし

「何でこの本に青いポリスボックスが書いてあるの？」

何かこれ「doctor who」とか書いてあるんだけど……店員さんに聞いてみよう。」

「ああ、これですか？今流行りのドクターフーですよ。知らないんですか？でも、この人実在するって噂があるんですよ。その話なら永琳さんが詳しいらしいですよ。」

おい、まて、永琳、もしかしてお前広めたか？俺のことは「知られざる英雄」で忘れられたらと思うてたのにこんな形で残しやがって……ヤバいぞ。ターデイス置きっぱなしじゃばれるぞ。」

「そんな顔して、ターデイスがばれるとでも思ったの？」
後ろから聞き覚えのある声がある。

「ターデイスなら私の研究所まで運んであるから大丈夫よ。」

「久しぶりだな。永琳」

「ええ、久しぶり、ドクター」

永琳に会い、そして、永琳の研究所まで案内してもらった。すごいな。トーチウッドみたいだぜ。

「永琳、なぜ君は俺のことを忘れなかったんだ？俺の「異常」《アブノーマル》で、忘れるんじゃない」

「私の能力言っていなかったっけ？私の能力は「あらゆる薬を作る程度の能力」よ、「異常」《アブノーマル》を打ち消す薬を作るくらい簡単よ。」
と言って笑う。

「あ、ここに来た理由なんだが、君は俺のソニックドライバー持ってたままだったな。」

「肌に離さず持ってるわよ。」
とどこからか古びたソニックドライバーを取り出す。

「そう、それをもらおうと思って。」
有った方がいろいろと便利だしな。

「これは駄目よ。でも、私の作ったソニックドライバーならあげるわ。」

何で？まあ、もらえるんならいいけど。

「作るのに少しかかるから、そうね……これでも見たら？」
と妙なカードを渡してくる。

「これは何なんだ。」

Doctor Whoとか書いてあるから嫌な予感しかない。

「これをプレイヤーに入ればdoctor who がみれるわ。
本人の感想が聞きたいわ。」

「ちょっと待てこれは君が？」

「ええ、原案は私が考えたのよ。すごいでしょ」
「すごくねえよ。」

「じゃ、ソニックドライバー頼んだよ。」

「ええ、任せて。」

と永琳は自分の研究室に入っていく

「じゃあ、これでも見ますか……」
とカードをデッキ入れ再生する。

数時間後

「やっぱ、面白いな。」
本家の感じが出る。こっちのドクターは本家と同じように世界ではなく空間と時間を旅してるみたいだな。

「ドクター！ちよつと来てくれる？」
と研究室から声がする。

「わかった」

ガチャ

「こりゃ、すげえや。」

壁にはそこらじゅうに設計図やら何やらが貼つてある。

「出来たわよ。これが私特製のソニックドライバーよ。」
おい、何で11代目のソニックドライバーなんだ？君に渡したのは10代目の奴だったのに。

「あ、ありがとう」

「え？もしかして気に入らなかった？……」
そんな捨てられた子犬みたいな目でこちらを見るな。

「い、いや、少し渡したのと違うかったからびっくりしただけだよ。」
何が違うんだ？

「大きくなっちゃった理由はね、デットロックシールドも開けられるようにしたかったんだけど、無理だったから神力やら

妖力、それに能力でロックされたものも開けられるようにしておいたわ。」

「それはいい。ありがとな。」

「どういたしまして！」

ありがとって言っただけでどんだけ喜ぶんだ……

「これは、何なんだ？」

永琳の作業台にはソニックドライバを大型化したようなものが置かれている。

「ああ、これ？最近依頼があつたのよ。ソニックドライバより少し攻撃性が強くて物質を老化させられるわ」

おい、それって

「レーザースクリュードライバーって言ったかしら？」

こんなもの何に使うつもりなんだ？

「誰が依頼を？」

そういうと永琳は依頼書のデータを探るが、

「依頼人は書いてないわね。調べておく？」

気にしないでいいだろ。

「いや、別にいいよ。」

「で、あなた、返事は？」

え？返事？

「返事？」

「そう、返事よ。返事！」

そう、どんとんと近寄ってくるな。

「ちょっと待つてくれ俺からすればあれを聞いてからまだ半月ぐら
いしかたつてないんだ。もう少し待つてくれ。」

早すぎというか俺と永琳じゃ時間の進み方が違うからな

「わかったわよ……でも、絶対にまた来なさいよ。」

「ああ、必ずな。」

今度は俺じゃなく君が来る番だけだな。

「あ、いいこと思いついたわ……」

と俺に耳打ちしてくる。ああ、そういうことが、ドクターフーがあ
る此処だからできることだな。面白そうだ。

翌日

今俺はターデイスの中で永琳とモニターを見つめている。モニター
には月の都市最大の広場が映し出されている。今日はちょうど休日
だから、人はたくさん……準備は完了だ。

「じゃあ、準備はいい？」

「ああ、OKだ。」

そう言いターデイスを作動させる。

ギューーン！ギューーン！

「さあ、着いた。皆さんの反応を楽しもうじゃないか。」
ガチャ

「おつと、ここまでとは……」
ターデイスの周りが人で囲まれてやがる。ここまで人気なのか……
テレビ局のレポーターみたいのもいるぞ。

「あ、あのあなたがドクター？」
レポーターらしき人がマイクを向け聞いてくる。

「ああ、俺の名前はドクターだが？」

「え！？ホントに？大ファンです！サインお願いします!!」
と周りにいるみんなが群がってくる。

「やっべえ、永琳後は頼んだ。」
と永琳を外へと追いやりドアを閉める。

「じゃあ、またね。」

「ああ、また。」

ギューーン！ギューーン！
ターデイスを作動させる。

月のニュース

「本日正午ごろドクターとターデイスが中央大広場にて……」

その日この話題が尽きることはなかった。

ターデイス内部

「そろそろ燃料補給しないといけないな。どこへ行こうかな。」
時空間の裂け目と言っても……そうだな。カルフォルニアのサンアンドレアス断層に行こう。あそこなら人も来ないし完璧だろ。

「では、100年後のサンアンドレアス断層へLET's go!」

ギューーン！ギューーン！

ガチャ

「ここで、24時間か……何もすることがねえな。」

ギューニユ〜

と空間に裂け目ができ、おい、まであれは……

「一緒にお茶でもいかがですか？」
八雲紫《隙間妖怪》だ。

「いや、遠慮させてもらおう。」
とドアを開けて入ろうとするが

「おい、何をした？開かないぞ。」
境界を弄ったか

「その妙な箱の入り口は閉じさせてもらいましたわ。さあ、少しお話でもしません？」

まだ、あの胡散臭い笑みではなく普通の笑いだな。まだ、生まれてからそれほど経ってないのか？

「だから、勘弁だ。」

とさっきもらったソニックドライバーを取り出す。

「そんな棒で何ができるっていうんです？」

ギョーン、ギョーン、ギョーン、ギョーン！

ガチャ

「ほら、この通り。」

ほら、目を丸くして軽く放心状態だ。

「わ、私が本気で能力掛けたのよ！何で、そんな光る棒で、開くのよ〜」

とうなだれる。

「わ、わかったから、俺も此処から後1日は動けないからな。一緒にお茶でも？」

「ご、ご一緒させてもらおうわ。」

と八雲の手を引きターディスに引き入れる。

「何よ此処。境界でも弄ってるの？」
「そんなことできるのは君ぐらいだよ。」

「そんなことはしてないよ。こういうもんなんだ。割り切ってくれ。」

「ええ、そうさせてもらおうわ。」

「では、下へ行こうか。」

「下？此処って地下があるの？」

「ああ、地下に居住スペースがある。そこでお茶しよう。」
と二人でらせん階段を下りる。

「さあ、お茶を飲みながら話でもしよう。」

と、俺はお茶入れにキッチンまで行く。

「ねえ、あなた何で名前も知らないのに中へ？」
紫が聞いてくる。

「別に理由はない。暇だったからな。それに俺の名前はドクターだ。」

「私も名乗らないとね。私の名前は八雲紫よ。」

「君は妖怪だろ？まあ、俺の推測だが」

お、今回はうまく淹れたな

「何でそれを……」

「こんな断層の近くに人間がいるとは思えないしな、第一ここに人間が来るのはもう少し後だからな。」

紅茶にしたがよかつたかな？

「まるで未来を知っているかの言い方ね。」

「ああ、知ってるんだ。」

「バカを言いなさんな。妖怪でもなく魔力や霊力もほとんどない。そんな人間が未来を知っているなんてありえないわ。」

ありえないことなんてありえないんだよ。

「君はこんな噂を聞いたことはない？100年ほど前に諏訪大戦があったのは知ってるよね。」

さすがに知ってるだろ。

「ええ、知ってるわ。って……もしかしてあなたは
思い至ったように驚愕する紫

「そう、俺はその場にいた唯一の人間、「時の王」だ。」

時の王ってなんか中二病ぽくっていやなだけだな

「な！？あなたがあの時の王だって言うの？あの後消息が分からなくなっていたけど」

「あの後は月にいたんだ知り合いのところ인데、ここにはこれの燃料補給にね。」

そうしてお茶しながら1時間ほど話した。

「お！燃料満タンじゃないか、やっぱり閉じる前の時空間の裂け目

は違うな。」

一日もかからなかったぜ。

「じゃあ、俺はそろそろ行くぜ。君はこの世界でやることがあるんだろ？」

「ええ、私は妖怪と人間の共存を考えているわ。このままいけば科学に妖怪は押し切られるわ。それを防ぎたいのよ。」

「それができることを楽しみに待っているよ。」

「ええ」

ガチャ

紫がターデイスから出ると同時に作動させる。

ギューーン！ギューーン！

「あいつにカレーを奢りにいかないとな。」

続く！

次回に

ソニックドライバー（後書き）

遅くなりまして申し訳ありません。書き貯めが消滅したりといろいろありまして遅くなりました。ソニックドライバーですが10代目のもいいですが11代目の方が好きでしたので変更いたしました。では、感想よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8398x/>

知られざる世界の旅人

2011年11月10日03時15分発行